

42235

教科書文庫

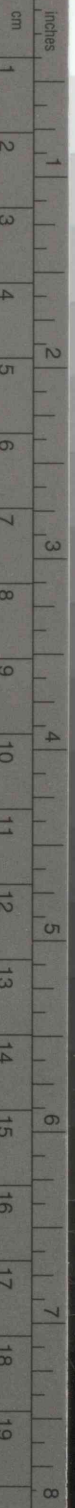
4
810
42-1927
2000030
20000 66134

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



46
810
昭1

訂改 女子新國文 卷六



資料室

日二十月一年二和昭 濟定檢省部文
用科語國校學女等高

編一矢賀芳 士博學文

文國新子女 改訂

六卷



京東
允發房山富 會合
社資

4b
810
5B/

12



古懷

天 安 河 原 町 田 曲 江 筆



訂改

女子新國文 卷六目次

一	秋が来た	野口米次郎	一
二	東洋の秋	芥川龍之介	三
三	美術の鑑賞(自修文)	川路柳虹	八
四	「鷹が渡る」	野村傳四	三
五	やはらぎの心	生田春月	六
六	植物と氣象との關係	三好學	三
七	博雅の朝臣	(今昔物語)	三
八	いちひの樹	吉田絃二郎	七
九	橄欖の一枝	坂口昂	四
一〇	英國國民性の一面(自修文)	幣原坦	四
一一	松の下露	(太平記)	五

目次

一	懷古	島崎藤村	五七
二	水の音	相馬御風	六二
三	みやび		六五
四	渡鳥	吉江喬松	七〇
五	禁庭の野分(昭憲皇太后御作)		七六
六	秋の歌冬之歌		七八
七	實體實相	松浦一	八〇
八	小兒の世界(自修文)	西條八十	八四
九	常に新しいといふこと	田山花袋	八九
一〇	私は自然を禮讚する	野口米次郎	九〇
一一	春立つころ	金子薫園	九六
一二	女流の俳人	荻原井泉水	一〇〇
一三	秋の句冬の句		一〇九

一四	俳句評釋(自修文)	沼波瓊音	一一三
一五	室内の花	與謝野晶子	一二六
一六	ユーゴーの母	下田歌子	一二二
一七	和宮内親王の御婦徳	萩野由之	一二七
一八	狂歌		一三五
一九	笑(自修文)	戸川秋骨	一三六
二〇	文學と氣品		一四一
二一	諺と道徳	藤井乙男	一五二
二二	本多重次	新井白石	一五七
二三	醫者のくるまで(自修文)	(高等小學讀本)	一六二
二四	空しき篤學	鶴見祐輔	一六六

能文
は調子
韻文
詩
かよ
かよ

改訂 女子新國文 卷六

一 秋が来た

野口米次郎

あづか二三日のことで、
空氣が金びかりし始めました。
白羽二重をその中にさらしたなら、
きつと黄色に染まりませう。
今あたしは廊下の障子をあげ、
十月なかばの空氣を吸つて、
その甘いのに驚いてゐると、
どこからか無数の赤い蜻蛉が飛んで来て、

物景の外

秋が来た

Blank page with faint vertical lines and bleed-through text from the reverse side.

わたしの眼の前で入交り、黄金の空気を浪うたせます。

澤山ある花の中で、わたしは木屏を一番すぎます。

葉の下から小さい内氣な花が咲いて、

人の知らないまに散つてしまふ。

暑い夏から咲きどほして来た百日紅も、

今は二つ三つの花が残つてゐるばかりでございませぬ。

しばらく雨が降らないので、

伽羅の黒びかりする葉もよごれ、

廊下に懸けたカーテンの染が特に目立つて来ました。

地面はもはや薄ら冷たいので、

けふは一足の蟻さへ出てまゐりませぬ。

池釘
釘
釘

御承知
御承知
御承知

Curtain.

(一) 東京市麴町區。

二 東洋の秋

芥川龍之介

自分は日比谷公園を歩いてゐた。

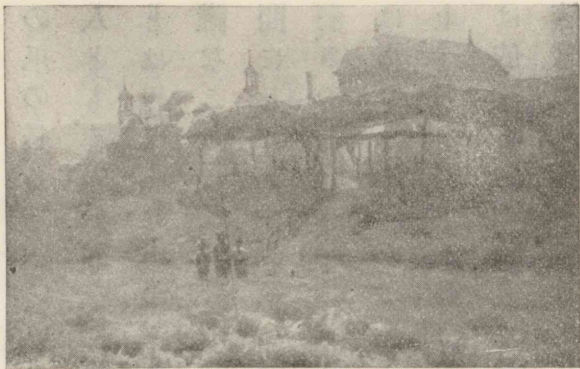
空には薄雲が重り合つて、地平に近い樹々の上だけ、僅かにほの青い色を残してゐる。そのせいか、秋の木の間の路はまだ夕暮が來

ないうちに、砂も、石も、枯草も、しつとりとぬれてゐるらしい。いや、路の右左に枝をさしかはした篠懸にも、露に洗はれたやうな薄明りが、やはり黄色い葉の一枚毎にかすかな陰影を交へながら、懶げに漂つてゐるのである。

自分は籐の杖を小脇にして、火の消えた葉巻をくはへながら、別にどこへ行かうといふあてもなく、寂しい散歩を續けてゐた。

そのうそ寒い路の上には、自分以外に誰も歩いてゐない。路をさし挟んだ篠懸も、ひっそりと黄色い葉を垂らしてゐる。ほのかに霧の懸つてゐる行手の樹々の間からは、たゞ噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさゞめきを送つてくる。その上けふはどういふわけか、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海のやうに、蕭條とした木立の向ふに静まりかへつてしまつたらしい。——と思ふと、鋭い鶴の聲がしめやかな噴水の響を壓して、遠い

林の奥の池から、一二度高く空へ揚つた。



(筆志工藤後) 後午の谷比日

そのうちに次第に黄昏が近づいて来た。自分の行く路の右左には、苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一緒に、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の薫かも知れない。と思へば、路端の水溜りの中にも、誰が摘んで捨てたのか、青ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。

自分は思はず足を止めた。

自分の行手には、二人の男が静かに竹ぼうきを動かしながら、路上に明るく散亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巢のやう

鳥の巣のやうに
静かに
歩いている

静かに
歩いている

な髪といひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破衣といひ、獸にも紛ひさうな手足の爪の長さといひ、いふまでもなく二人とも、この公園を掃除する人夫の類とは思はれないのみならず、更に不思議なことには、自分が立つて見てゐる間に、どこからか飛んで來た鳥が二三羽、さつと大きな輪を廻がくと、默然とはうきを使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を争つて舞ひさがつた。二人は依然として、砂上に秋を撒散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。自分は徐に踵を返して、火の消えた葉卷をくはへ



一のそ (筆雪關本橋) 得拾山寒

(一) 寒山は唐の隱者、拾得は同代の奇僧で、豊干國清寺の豐干に拾ひ養はれ、因つて拾得といふは無二の友人である

ながら、寂しい篠懸の間の路をもと來た方へ歩きだした。

が、自分の心の中には、いつか靜かな悦がしつとりと薄明るく溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべき自分の迷たるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閑しながらも、今日なほこの公園の篠懸の落葉を搔いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懐かしい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないのに違ひない。自分は篠の杖を小脇にしたまゝ、氣



二のそ (筆雪關本橋) 得拾山寒

(眩)

軽く口笛を吹鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た、寒山拾得は生きてゐる。と口のうちに獨りつぶやきながら。
沙羅の花

目次

三 美術の鑑賞

川路柳虹

美術 繪、彫刻、建築
など美を表す
ことを目的と
する技術
偶然 おもひがけな
く不意に

總べて美術といふものは、何に限らず、味はふことによつて價値が出てくるものです。どんな作品にせよ、美術家が精神を籠めて作つたものである以上、これを観る人は、その苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然にできるものでない以上、その作品はどう感じたかといふことを考へ、そして、それを觀て自分はどうか感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味はふことです。この「味はふ」ことを鑑賞と申します。畢竟、繪でも、彫刻でも、これを作つた人は、自然について感じたことをそれに表したのですから、その表したものは、即ち作者自身の考や、もの

作者の
苦心
自己の
感性

感性的
美的
藝術
(技)

個性
そのもの特有
な性質

漠然
ばつとして明
らかでないさ
ま

見方の態度を示したものであるといへます。それ故、一つの美術品を味はふことは、單に作品を味はふことではなく、その作品を作つた作家の精神を味はふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人のかいたものと、乙の人のかいたものでは、色も、形も、總べて相違してゐます。それはなぜかといふに、作者がそれぞれ自分自身の個性によつて、同じ色でも、甲はこれを強く表し、乙は非常に弱い調子で表すといふ風に、その作者の心持や感じが異なるからです。その異なる所に個性の差が生ずるのであり、美術上の作品は、各作者の異なる個性を表すからおもしろいのです。美術家は一般の人がなん等の注意も拂はない所に非常な注意を拂ひ、人の氣付かない所に美を發見します。一般の人でも、夕日の美しさは、漠然ながら知つてゐませう。しかし、その夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。美術家は自然のさういふ微細な

理智
わきまへ知る
知識

點にまでも常に注意してゐますから、そこから人の常に看過してゐるものに對して、非常に美しいものを發見してくるので、すなから、繪や彫刻を見るといふことは、一面には、さういふ自然に對して私たちの看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふことになります。美術品の味はふことは、その味はふことによつて、常にはなんでもなく見えてゐた自然が、かうも美しいものであるかといふことを、ほんたうに知る所にあります。私はよく、私には美術はよくわからない。とか、どこが善いのか悪いのか見當がつかない。とかいふことを聞きます。この「わかる」といふことは、無論その作品を理解することを意味しますが、しかし、美術品を理解するには、科學などを理解するやうに、たゞ理窟にだけ依つてはいけません。勿論、理智も必要ではあります。が、美術品は理窟によつて解する以外に、感ずる」といふことが必要です。だから、美術の鑑賞には、どういふ風に理解したか。といふこ

虚心平氣
心があつさり
してゐて氣も
ちのおだやか
なこと

とよりも、どういふ風に感じたか。といふことが肝腎です。なんとすれば、美術品はやはり人の感情に訴へるもので、何よりも人を感動させるものですから、これを觀てなん等の感じも起らないといふなら、それはその作品が美術品としての資格を備へてゐないか、或はこれを觀る人が感情に乏しいかに因るのです。ここに感情といふのは、悲しいとか、うれしいとかいふことを意味する感情ではなく、むづかしくいへば、感性といふべきもの、即ち感ずる心のあることをいふのです。感性がなければ、ほんたうに美術品の鑑賞はできません。結局、美術を味はふといふことは、自分の氣持を以てその作品を觀るといふことです。それでは、いかにすればさういふ風に、自分の感情で美術品を理解することができるかといふに、それには、まづ虚心平氣で作品を觀ること、なん度もなん度もこれを熟視すること、その技巧を知ること、これ等の條件が必要です。作品を味はふ爲には、徒に

邪念
れちけた心。

油繪 西洋畫の主な
もので、油繪具
でかいた畫。
水彩畫 油繪の對、水
彩繪の對、水
具を用ひてか
いた畫。

他人の噂や評判などに動かされないので、自分でどれを好むかといふことを考へるべきです。その爲には、まづ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、それをなん度もなん度も熟視してゐることです。そのうちに、いろいろなことがわかつて來ます。さて、それから一般の技巧即ち作品の技術を見るのです。巧であるとか、拙いとかいふことは、要するに比較ですから、澤山な作品を見た上でなければわかりません。澤山な作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次には、その作品がどういふ風にしてできてゐるかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の知識を養はなければなりません。それは急に一時に知るわけには行きません。樂譜に關する根本の知識に缺けてゐては、せつかく音楽を聴いてもわからぬやうに、よく美術品を理解するには、やはり一通り技術に關する知識を有する必要があります。油繪と水彩畫との差、繪具の名前、それ

調子 英語 Tone の
譯、色の濃淡。
筆觸 英語 Touch の
譯、筆の調子
筆ぐせ。

様式 英語 Style の
譯、畫の流派、
圖から。

から、調子とか、色とか、筆觸とか、様式とかいふやうなことも、その意味くらゐは心得てゐなければなりません。

四 「鷹が渡る」

野村傳四

「鷹が渡る。」といふ鋭い聲が、秋の空氣を突抜けて、村の一隅から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稻の穂波の黄ばみわたつた田の中からも起る。椿や竹の林に隠れた家からも起る。時は愁人の膚を、ろに寒い頃、渡鷹の一群が南を指して、秋の空を渡り行く偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中いづれの地にも見ることはできない。

嘗て余は黒潮の流を下つたことがある。流の早い海峽を通過したこともある。深碧の潮の流は直径十數町にわたる一大圈を劃して、盛に渦を巻き、眞白い泡を表面に漲らして、汽船をも巻きこみ、岩

朔北

をも押流すやうな勢で流れて行く。雪寒き朔北の天地から、椰子の葉青く風薫しい南洋の冬に渡つて行く一種の鷹は、まさにこの潮流と同じく、大空を廻轉しつゝ、進んで行く。そして、また同じく偉觀である。

音を發すると間もなく空に吸ひこまれる花火の烟ほどの雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には秘密な隠家もない時、南を指して雙翼を伸したこの避寒客の數は、十萬か、五十萬か、はた百萬か知らぬ。初めひよくらゐに見えた一群の鳥は、高く舞ひあがる爲に、障害物もない大空に、直徑數町もある一大圈を劃し始める。一隊が一廻轉したかせぬかといふ頃になると、ひよくらゐに見えた形が、雀くらゐに小さくなる。すると、一隊は一まづ南方へ流れ出す。夢のやうにすうと飛んでは翼をせはしく使ふさまは、はやぶさに似てゐる。暫くするとまた廻轉し始める。雀ほどな影は更に遠ざかつ

(轉)

(集)

墨痕

隊伍肅々
神韻縹渺

て、糠蟲ほどになる。更にまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間に、一個一個の影は、青絹の上に落した墨痕のやうに見える。そして、一隊が南へ去れば、後の一隊がその後を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。しかもこの大集團



(筆畝東瀨廣)

姿に一羽の外れるものもなく、聲を立てるものもない。恰も南より北に奔る天の川があるやうな星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として、萬里遠征の途に上るさまを想像させる。神韻縹渺たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。「鷹が渡る」といふ聲が、この時村のどこかに響きわたると、直ちに

首途 （カウモリ）
（カウモリ）
（カウモリ）
（カウモリ）
（カウモリ）

げげんな

全村の注意を惹く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、地だんだ踏んで、鷹よ、鷹よ、と小さい喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人はもみを一杯に干した庭に滑り下りて、見えぬ眼を擦りつゝ、青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみわたつた畑に立つ夫婦は、しばし鍬の手を休め、頭の手拭を取去つて顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ互に相顧て、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どんどん南へ去る。見送る人の心はさまざまであらう。裏の畑に穂を摘む鶏は、げげんな顔を上げ、長く伸した頸を傾けて、空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騒いでゐた群雀は、ちゆちゆといふ一羽の相圖にびたりと鳴りを静め、ひれ伏して、笹陰から天上の行列を送る。茅ぶきの屋根に秋の日を浴びて、睦ましく遊んでゐた家鳩の夫婦は、あわたゞしくわが巢に引籠つ

蠢々

殿軍

(一) 鹿兒島縣大隅國肝屬郡九州の南端

(二) Philippine (比律賓) 臺灣の南方に在る群島

山村水郭

て空を仰ぎ見ることすら敢へてしない。渡鷹の大奇隊は蠢々たる地上の影を顧もせず、悠々として南へ去る。かくて前後一二里にわたる大軍は、僅少な殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより二三里を距てた地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脉を眼下に見進んでは、佐多岬の燈臺を兒戯と観て、洋々たる大洋を、きのふもけふもと南へ越えて行くのであらう。目的とする所は臺灣か、フィリピンか、但しは南洋の島々か。「鷹が渡る。余は弱冠にして家を出で、故郷の秋に背くこと、ここに十幾年である。しかし、身は何處の境に在つても、この一語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山、近嶽、山村、水郭を背景として、渡鷹の大軍が一大パノラマの如く眼前に浮かぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は、余の腦裡に黒潮の如く渦巻き、渡鷹の如く廻轉する。」

五 やはらぎの心

生田 春月

廣い廣いはてしもない大海の中を、一つの木片が漂うてゐる。木片は潮に揉まれ波にたゞかれながら、はてしもない大海を、どこにいふあてもなく、なんの爲といふこともなく、恰も誰かに命ぜられたやうに、たゞ一つ寂しく漂うて行く。ちやうどその時、この大海の他の一端にも、同じやうな一つの木片が、同じやうに漂うてゐる、どこといふあてもなく、なんの爲といふことも知らないで。そして、或時、或瞬間に、この二つの流木が、偶然、ほんの偶然にはつたりと出會ふ。それは運命といつてもいい、また天の攝理といつてもいい、ほんの何かの拍子で、はてしもない大海の中で、二つの木片と木片とはひよいとぶつつかる……と思ふと、すぐまた離れてしまつて、もとのやうに、またてんでに違つた方向へと漂うて行く。

攝理

これがこの世に生きてゐる私たちの姿ではなからうか。人間同士も、この二つの浮木のやうなものではないであらうか。

思へば寂しい人間の姿である。孤獨な人生の道である。けれども、その孤獨な人生の道にも、同じ人間仲間が、偶、たとひほんの一瞬間でもふと行會うて、心と心との相觸れる微妙な悦を感じ合ふことができるのだと思へば、そこに無量な慰めが湧いて來はしないか。同じ世に生まれ合つたといふことも深い因縁である。それが偶、地上の一角に落合つて、親しく顔を見合ひ話し合ふといふだけでも、深く考へれば有難い事實である。なんでもなく思へば、これくらいなんでもない當然なことではない。數の知れないほど澤山ゐる人間が、どうして出會はないでゐられよう、互に交渉を持合はないでゐられよう。それは當然なことではないか。さういふ人も多からう。しかし、その何十億か、何百億か、測り知られないほどの澤山な人の

友
心
友
友
知人

中で偶然同じ時代に生まれ合ひ、同じ國の同じ土地に生まれ合ひ、しかも、その上親しく話し合ふことのできる人は、抑、どれほどあらう。世界中の人の數に比べて見れば、それはほんのいふに足らぬ數に違ひない。それが更に知人となり、友となり、親となり、子となり、夫婦となることを思へば、千中の百、百中の十、十中の一、目に見えぬ不思議な手によつて選り出され、引合はされ、結び付けられること、不可思議に、驚を覺えないでゐられようか。これが奇蹟でなくてなれど、大海の真中で二つの流木が偶、行きあたるのと、それは全く同じことではないだらうか。どんなに人間が澤山あつても、大抵は一生なんの縁故もなくして済んでしまふのだ。そんな人があるとも知らずに過ぎてしまふのだ。その中で、偶、縁あつて何かの交渉を持つことになるといふのは、そこに深い因縁があつてのことではない。それには、それはもはや無心に自分を運んで行く波浪では

眞理

眞理
縁
難

順縁
逆縁

なくて、やはり自分と同じ流木でなければならぬ。
「袖ふりあふも他生の縁」といふ諺があるが、その言葉の中には、温かい眞理が含まれてゐる。それは人間的でもあり、また宗教的でもある深い心持を含んでゐる。その中には、しみじみと心に觸れるものがある。それができないならば、私たちは今知らず識らず行つてゐるやうに、互に憎み合つたり、争ひ合つたり、謗り合つたりしないで、互に愛し合ひ、互に理解し合はなくてはならないと思ふ。
友だちや縁者はもとよりのこと、たとひ敵でも、全く縁なくて過ぎてしまふ人よりはよい。佛敎に順縁といひ逆縁といふことがあるが、友だちが順縁の知己であるならば、敵は逆縁の知己でなければならぬ。さうだ、敵は逆縁の友である。どんなに憎み合ひ、傷つけ合はうとしてゐても、すでにそれだけ互に關係し合つてゐるとい

ふことに、なみなみならぬ意味が見出されはしないか。互に空氣のやうに見過すことに比べれば、敵と敵とは互にその價值を見出し合つてゐるものである。互に尊重し合つてゐるものである。それをほんたうに心から感ずるやうになつたならば、私たちは互に罵り合ひ、憎み合ふことをやめるであらう。

人を人に結び付ける事情は、たとひどんなにいふに足らぬものであらうとも、かやうに深く深く考へて行つたならば、限り知れず尊いものであることが感ぜられてくるのだ。

私たちを大海に漂ふ一つの浮木と観ずる時、私たちの心には、靜かな、そして、稍悲しいやはらぎの思、和解の思が湧いてくるではないか。愛について思ふ時、愛について語らうとする時には、私たちはまづこの和睦の氣持、やはらぎの心に注意して見なければならぬ。誠の愛は、かやうな平和な、おだやかな、あきらめの地盤の上に咲

地盤

大
ク
子
あり

にも
佛性

些細

名利の争

景觀

出づる花ではないであらうか。もつとはつきりいつたならば、無常を觀ずる心こそ、誠の愛を生む胎ではないであらうか。
私たちがいつかは死なねばならぬ人間の身であることを眞實心から感じ得たならば、誰が些細なことに無益な争を演ずるであらう。しかも私たちは、一人残らず死ぬべき人間だ。若し私たちが一週間の後には残らず死なねばならぬことがわかつてゐたとしたら、私たちは今現にやつてゐるやうに、空しい名利の争に執して、互に憎み合ひ罵り合ふことをやめるに違ひない。そして、一週間と五十年とは、永遠の時の前にはなんの相違があらう。——智慧に輝く愛——

六 植物と氣象との關係

植物の景觀と自然の氣象との間には、自らなる關係ありて、互に相依り相扶けて、以てこの宇宙の美を現出するなり。故に晴、雨、雷、風、

雲、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する植物の景觀に注意すれば、誠におもしろき趣あるものなり。

春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲亂れたるは、誠に趣深きものにして、その調和の美しいふべからず。今假にこの櫻花をして澄みわたれる秋の空に開かしめば、いかなるべきか。恐らくはその優美艷麗なる特性は、十が一をも現ずること能はざるべし。また春の野の霞にこめられて、をち方の山々は淡き紫色に匂ひ、れんげ、たんぽぽなどの一面に咲亂れたる中に、蝶、蜂などの訪れ來て、心地よげに飛狂へる光景は、よく花曇の日和と和して、誠に長閑なる心地せらる。

新緑の候となれば、快晴の日にも空氣は水分を含みて、なんとなう夕立の雲起りくべきかと思はるゝものなるが、その青き空に、緑滴らんばかりなる竹樹の枝さし交したるは、その配合殊に妙にし

て、人をしてそゞろに夏のおもしろきを感ぜしむ。

やがて晩秋の節となれば、空氣清らかになりて、遠きあたりまで見やうらるゝに、楓、公孫樹などの霜に色づきたるが夕日に映えたるさまなど、またいひ難き趣あり。冬の末より春の初にかけては、寒さ厳しき清曉に、梅、臘梅などの雪に傲りて、いち早く咲出でたるは、氣高く心地よきものなり。

(筆琴眞築都)



清曉
雪に傲る

(燕子花)

幽情

降出でて、そのたび毎に花の艶麗を増すなど、人をして限りなき一種の幽情を催さしむ。殊にこれ等の植物の花弁と葉とは、自ら雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴はその上に小さき玉水となりてとゞまれるが、その美しさ誠に形容し得べくもあらず。

驟雨などの烈しき雨にも、また自らなる植物の配合はあるなり。そは多く雨滋き地に生育せる植物、またはさる地より移し植ゑられたる植物にして、かの梧桐の如きはその一例なり。その直立して膚青き幹、その浅く切れこみたる廣き葉の、一は新たに洗はれて、一入鮮緑の色を増し、一はばらばらと音を立てて、その葉末より餘滴をしたゝらする光景は、よくこの植物のかゝる急雨に適せるを見るべし。

蓮の葉もまた雨を受くるに適せるものなり。そは葉の表に一面にビロードのやうなる細かき突起ありて、その間に空氣を含むを

餘滴

葉

以て、雨に遭ふとも少しもぬるゝことなればなり。かくてまたその空氣はよく光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も殆どこれに等しき構造をなせり。

秋雨につきて聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ人の心をひくは芭蕉なるべきか。秋も末になりて、その葉の破れ筋の現れて、見るからはかなげなるに、寂しき雨のうちそゝぎたる人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめんとす。

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、その雨に潤ほひて、細き葉の束ねたるやう



(筆華秋橋高) 蕉 芭

しめやか

になりて、少しうつむきつゝ、雨滴を滴らするさまは、またしめやかなる趣なきにあらず。
 雪は寒國のものなれば、これに適するは寒地の植物なれど、暖地の植物にもまたこれに遭ひておもしろき景色を見するものあり。かの常磐木の類、例へば、もみ、杉、松などの類の濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、また南天の赤き實のその間にほの見えたる、共に色彩の配合上見棄て難き美觀なり。また松のその魁偉なる枝もて、竹のそのしなやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は豪壯、一



(筆舉春元山) 雪の杉

魁偉

なからずやは

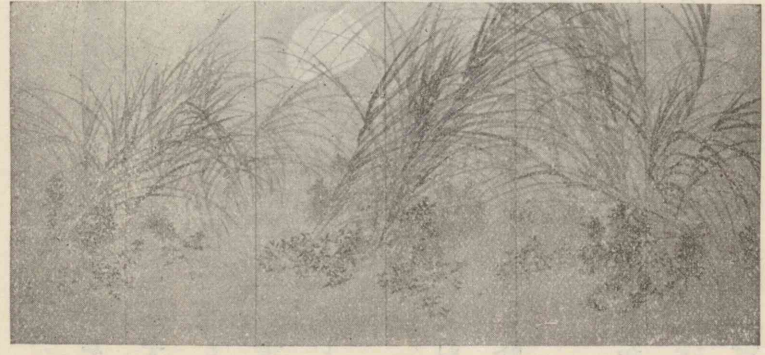
松濤

は清楚なる趣ありて、共に賞すべし。
 風の趣もまた棄難し。そよ吹く風の草木をわたりて優しき樂を奏する、木枯の落葉を吹捲きて凄じき音をたつる、共に興なからずやは、殊に野邊の薄水邊の蘆の秋風に戦げる趣は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。また秋の夕澄みわたれる空に、一點の雲もなく、さしたる風のわたるとも見えぬに、樹々の梢のそよそよとうち戦ぐは、いひ知らぬあはれの籠るものなり。
 松濤、松籟、また一入の趣あるものなり。平地は風吹くとも覺えぬに、松の梢のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、誠に何の音ぞと怪しまる。古來幾たびか詩人の吟詠に上りつらん。
 雲は四時をわかずをかきものなり。春の山にたなびきて花かと見紛ふ白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峰、秋の野に飛迷ふ薄雲、いづれも皆とりどりのあはれ籠れり。また冬の日、かの木曾

(梅) 凍雲

木本科
葉
果
中庭
庭
景

日光あたりののみみ、つが、落葉松などの生茂れる高山を深く立ちこめたる凍雲は、誠によく幽邃の趣をあらはすものなり。
霧は高原に多きものなれど、平地、平原にもまた全くなきにあらず。夏の頃、朝霧の立ちたる時、杉もみなどの常磐木の見え隠れするさま、田沼、湖水などの一面にこめられたるさま、また一種の風趣あり。
露は夏、秋に下るものにて、朝、夙く起出でて叢の間を行かば、その葉毎に美しくして、恰も白玉の如くなるを見ん。殊に、稻、蘆などのやうなる禾本科の植物、またふきなどの葉の縁なる露は、規則正しく置けるを以て、



(筆穂百福平) 露 朝

庭
雨
月
主
さ
り
か
ま
し

(一)疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。
(宋 林逋)



(筆青蕪野水) 桐 梧

その觀頗る美なり。
月は季節によりて、その觀一ならず。春の夜は曇がちにて、おぼろ月多し。世にはこのおぼろ月に夜櫻を配して、得難き美景なりといふものもあれど、かの朝日に匂ふ山櫻の優美にして、壯快なるには比すべくもあらず。夏の月はこれに反して、頗る快活なるものなり。殊に、雨過ぎし木の葉草の葉に映じたる月光は、いひ難き涼味を生ぜしむ。中秋の満月は空にさえて、その光まことに常と異なるは、人のよく知るところなり。
月夜に適せる植物は餘り多からず。かの暗香の浮動を賞すべし

適くとしてよ
からざるなし

景致

といひならはせる梅なども、その花の美観は、なほ晝間を以て勝れりとする。されど一面よりいへば、取出てこれといふべき好配合のなきは、たまたま以て、適くとしてよからざるなき月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐の月、皆とりどりのあはれを具へざるはなく、さては秋野の満月、夏山の曉月など、いづれも他に求め難き景致を具ふるにあらずや。——三好學、植物生態美観による——

七 博雅の朝臣

今は昔、源博雅の朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬づのことに勝れてありける中にも、管絃の道に、なんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸と

管絃の道
えならず

殿上人

雑色

あながちに好む

ぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし。と盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとともかくても過してん

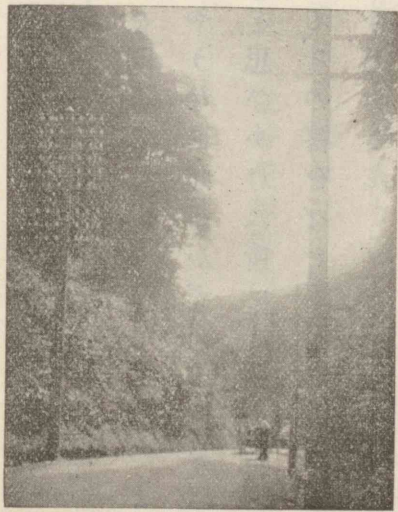
宮もわら屋もはてしなれば

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、愈そのみやびの心に感じ、思ふやう、われあながちにこの道を好むによりて、この

かまへて

盲に會はんと思ふ心深し。されどこの盲の命いつまであらんも測り難し。わが命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん。」

と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことなかりければ、その後三年の間、夜な夜な逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や弾く今や弾くと密に立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅、あはれ、今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて



逢坂山

うはぐもる

心をやる

立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らして、ものあはれに思へる氣色なり。博雅これを極めてうれしく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じていはく、



博雅の朝臣

あはれと思ふこと限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。といふを、博雅聞きて聲を出して、王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ。」といひければ、盲のいはく、かく申すは

逢坂の關のあらしの

はげしきに

しひてぞみたる

世をすごととて

とて琵琶を鳴らしたるに、博

雅これを聞きて、涙を流して、

かたみに

誰にかおはする。と博雅のいはく、我はしかじかの人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。と盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聽かん。といふ。盲、故宮はかくなん、彈き給ひし。とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふにも、もろもろの道はたゞかくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしきものなりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりなければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

—今昔物語による—

八 いちひの樹

吉田絃二郎

(一)京都市愛宕郡。

(二)十月二十二日。

(三)京都市上京區、賀茂川にかゝつてある。木魚

行樂



秋の日はしづかに京の町を照らし始めた秋の行樂にはこの上

洛北大原の里に寂光院をたづねた翌日の午後、鷹ヶ峰に光悦寺を訪れた。その日は京の時代祭といふので、朝のう時ちから京都市中がなんとなく落着かぬけはひであつた。朝夜が明けたばかりに起きて、冷たい霜を踏んで三條の大橋を渡り、知恩院の木魚の音を聞いて、大津行の電車通にさしかゝつた頃は、甲冑に身をかけたため、馬の口を取らせて、悠々と板橋を鳴らす騎馬武者などに出逢つた。

八 いちひの樹

三七

(一) Temysan. イギリスの詩人。(西暦一八八〇年—一八九二年)
 (二) In Memoriam. 友人ハラムの死を悼んだ詩。西暦一八五〇年の作。
 (三) Arthur Hallam. 西暦一八二九年エミリー・テニソン嬢と結婚し、テニソンとの親交は更に姻戚關係となり、一八三三年ネチア(Neuchâtel)で客死した。

もない好天氣である。

北野の天神から金閣にまはり、三かゝへも四かゝへもありさうに思はれる金閣の玄關の前のいちひの樹の下では、思はず足を引

きつけられてしまった。

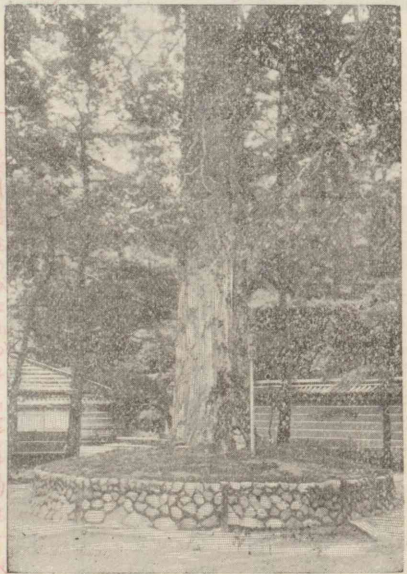
テニソンのイン・メモリアムの中の句を思ひ出したのであつて、老いたいちひの樹は、春が來ても、いつも憂鬱な顔をしてゐる。そして、網の目に張られたその廣い深い根は、幾多の人々の亡骸を包んでゐる。それはテニソンの無二の友アーサー・ハラムを葬つた寺の庭のいちひの樹を形容したものであつた。そこからはいつもの悲しい鐘の音が聞えてゐた。

私はいつも、いちひの樹を考へるたんびに、テニソンがゑがいたお寺の庭の憂鬱な樹を聯想してゐた。しかし、金閣の玄關の前のあの亭々として、なんのわだかまりも

太
 庭
 金閣
 樹
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

味識す

なく伸びて、そして、思ふ存分東西南北に素直に枝を擴げてゐる老いちひの樹を見てゐると、どうしても憂鬱な顔を聯想することはできない。明るくて、靜かで、それかといつて軽くもなく、どつしりした落着を持つた空氣に包まれてゐる金閣の老いちひの樹は、いつも柔かな深い小影を、白い砂の上に投げてゐる。そこには、どこまでも足利時代の寂びが漂うてゐる。平家の天下は花やかであり、豪快でもあつたが、まだなんといつても成上者に共通なざわめきがあつた。日本人がほんたうにももの味をその底に徹して味識することを、知るやうになつたのは、足利頃からであらう。



樹のいちひの閣金

奇峭 喧騒 惱亂 享樂 凝諦す

さういふ意味で金閣の玄關のいちひの樹を見てみると興味がある。そこにはかの古木にありがちな嵐にたゞきつけられたやうな奇峭といつた風な感じもない。枝も幹も靜かに、しかも、どつしりと伸びてゐる。すくすくと聳えた幹に對して枝の張方、葉の茂方すべてが圓満具足の形である。さうかといつて、決して花やかでもない。微塵の浮薄さもない。一枚一枚の葉は檜の葉に似て重厚であるが、更に形良く精練されてゐる。幹を包む皮にしても、檜に似て堅いが、もつと整つてゐる。磨きがかゝつてゐる。そこには喧騒や惱亂を聯想する何物もない。人生を厭離もしない。享樂もしない。悲觀もしない。樂觀もしない。ひたすら透明な智慧の空氣に浸されて悠久を凝諦してゐる大禪師の面影である。哲人のそれである。裏の木立に包まれた茶室を訪れて茶を喫する。この前訪れた時には、一人の老翁が茶を立ててくれた。老翁にはたゞ一人の男の子

修竹



衣笠山 (谷口竹童筆)

があつたが、東京の大震災で行方不明になつて、一年経つても消息もないといふ話を聞いたことがあつた。今度もその老翁がまだゐるのであらうと思つて立寄つて見たが、もうその老翁はゐないで、元氣な中年の男が茶を立ててくれた。老翁のことをたづねて見ようかと思つたが、止してしまつた。金閣を辭して、茅、薄などの道をめぐり、朱に染めた格子戸の家續きの町を過ぎると、道は歩一歩と爪先上りの、左手には近く衣笠山、右手には遠く比叡、振りかへれば賀茂川を挟んで京の町が、秋の日の下に擴つてゐる。登るにつれて家はまばらになつてくる。修竹の

八 いちひの樹

林を切開いて家を建ててゐる所もある。人夫たちが五六十人もひとかたまりになつて、土を運んだり、崖を崩したりしてゐる。鞍馬口あたり、八瀬あたりの道が白く、稻田の間を貫いて、南北に走つてゐる。

桐の畑がある。茶の畑がある。山城の山が大和の山が、そして、どこのもそれとも知れぬ白い流が、もやの下に漂うてゐる。二條の皇城も東寺の塔も、折る。

九 橄欖の一枝

坂口 昂

せはしいハンブルグ滞在中、私は半日の閑を偷んで、静寂なフリードリヒルへへ奔り、そこで心静かに、また心行くばかりビスマルクの晩年隠棲の舊邸を訪ね、またその今は長へに安らげく息うてゐるその墓を吊つた。

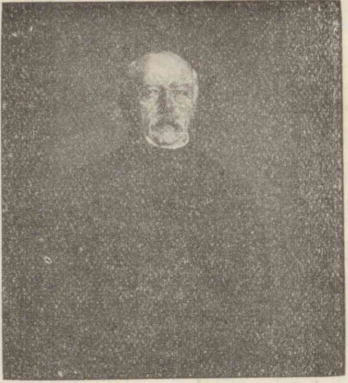
(1) Hamburg. ドイツ北部の貿易港。ベルリンの西北約百里。
(2) Friedrichsrnh. 前ドイツ帝國最初の宰相(西曆一八一五年—一八九八年)

(1) Prussia. (普魯西)ドイツ北部の國。

(1) Rex Fredericks

敵愾心

暗流



ビスマルク

國破れて偉人を思ふといふわけで、今日のドイツ、殊にプロシヤの人々が第一に追慕してゐるのは、フレデリック大王であるらしい。この人物の事蹟は、レックス・フレデリクスといふ題名で活動寫眞で演示され、盛に人氣を呼んで、大流行であつた。今日のドイツ人は學校でも、家庭でも、社會でも、時代の變化に應じて世界の公民としての教育を盛にし、これと同時に愛國教育、否、敵愾心鼓舞をもなかなか怠らないらしい。フレデリックに次いで、ビスマルクが最も思はれてゐるやうだ。勿論、或意味では、この人物の方が一層の人氣を惹くであらう。けれども聯合國、殊にフランスに對しては遠慮しなければならぬ歴史が、この人物に伴なつてゐる。だからビスマルクに對する崇拜は暗流たるに止る。回

(1) Kaiser.
ドイツ皇帝。
幕僚
高處大局に立
つ卓抜な見地
跋扈

(2) Wilhelm.
ウイヘルヘルム
二世。普通カ
イゼルと呼ば
れる。

顧すればドイツ最近の不幸は、カイゼル及びその左右の幕僚が、遠大な政治的伎倆を缺いてゐたことに根ざしてゐる。五十餘年の昔、いざ鎌倉といふ危機に臨んだ時、高處大局に立つて卓抜な見地から軍閥の跋扈を抑制し、歐洲的外交と國家的政策とを展開し、一着また一着と地歩を占めて、遂にはドイツ帝國を建設したのは、ビスマルクその人であつた。若し小ウイヘルヘルムの晩年、第二世のビスマルクが現れてドイツ帝國の上に立つてゐたならば、ドイツは全世界を引受けるやうな、あんな戦争の苦境には陥らなかつたかも知れない。所詮カイゼル政府には偉大な政治的手腕が缺けてゐたことが、今日のドイツに古來未曾有な大困難をもたらした最大原因であるに違ひない。

ビスマルクの思出は、ドイツを逍遙すれば隨時隨所に起つて、決して珍しくない。然るに今回の旅行の序、南歐に於て三たびフラン

のくりなく
よすが

(3) Marseilles.
(馬耳塞) フラ
ンス南部の要
港。

(4) Rhone.
フランスの東
南部を南流す
るマルセイユ
から約一
里。

(5) Avignon.
ローヌ河畔に
あつて、マル
セイユの西北
約三〇里。

(6) 西暦一三〇九
年クレモン
ツ五世はフイ
リッポ四世の爲
にローマから
この地に移さ
れた。故に幽
囚法王といふ。

(7) Petrarch.
イタリー人。
(西暦一三〇
四年) 一三七
瑞祥

スの風物に見参した時、ゆくりなく故人を憶ひ出すのよすがに接したのは、ここに記念せずにはおかれぬ氣がする。マルセイユから近郊遠足の或一日、足を伸してローヌを溯り、アビニオンに遊んだ。これは當年の幽囚法皇の故宮を訪ひ、詩人ペトラルカの隱棲谷をもしのばんが爲であつた。沿道は満目多くは橄欖の茂つた田野であつて、平和の瑞祥に溢れてゐる。私の夢は再び現代に返らざるを得なかつた。時はちやうど六十年前の昔である。當時ビスマルクはプロシヤのパリ駐在公使であつて、夏から秋へかけて、広くこの南フランス地方を漫遊してゐた。その間にベルリンでは軍備擴張問題の爲に憲法上衝突が起り、プロシヤ國王もほと



橄 欖

禪讓

披握

經綸

ほと困じはてて、一時は禪讓の考まで起した。時局はかくまで切迫した。この危機に陸軍大臣は急電をパリへ發して、ビスマルクを召還した。ビスマルクはそこで内閣議長として始めて議會に臨み、自己の胸中を披握し、大局の爲に上下一致、和衷協同を求めた。その際、彼が懷中の紙入から取出して議員に捧げたのが、即ち彼が最近にアビニヨンの森から手折つて來たといふ橄欖一枝であつた。時は一八六三年十月で、鐵血宰相の大政治的經綸はここに始つたのである。

自修文

一〇 英國國民性の一面 幣原 坦

凡そ世界の中で、社會の状態の最も變らない國はどこかといへば、まづ指を英國に折らねばならない。世界大戦によつて、各國特に歐洲諸國は、いづれも非常な變動に遭つてゐるに拘らず、英

依然
もとのまま

(一)横濱正金銀行

十年一日の如
し何年も變らず

保守的
習慣を保ち守
ること

國は依然として喬木の如く、舊態のまま、に聳えてゐる。ロンドンの町の光景なども、殆ど十數年前と大差がない。

正金銀行のロンドン支配人は、十數年前にもここに在勤して、今また再びここに勤務して居られる。その談によると、十數年前、自宅から銀行までの通勤の間に、常に定刻の汽車に乗合はす英國人は、同じ衣服を着て、同じ新聞を手にし、同じ座席を占めて、毎日變らなかつた。今またロンドンに來て、その定刻の汽車に乗つて見ると、やはり同じ人が十年一日の如くに乘つてゐる。たゞその知合はせてゐた顔が一つ二つ減つたのは、恐らくその人が亡くなつたのであらう。英國の社會状態の變らない一斑は、この一事によつてもよく知れる。

英國人はかやうに保守的であつて、習慣を重んずる國民である。若しかの汽車の時間に變更でもあると、習慣の定刻に乗ることができない。乗車の時刻に差違を生ずると、朝飯の時刻を變更

萬事萬端
すべてのこと

横車を押す
無理をおし通
喫煙
煙草を吸ふこ
と

せねばならぬ。主婦や下婢の起床及び勤務の時刻を變更せねばならない。これ彼等の堪難いところである。故に汽車の時刻なども日本のやうに時々變更されることなく、十年一日の如く不變である。

汽車の時刻の如きは、些細なことであるけれども、萬事萬端この有様で、すべての制度や法律も、皆生活そのものを基礎として定められてある。これ英國に於て、習慣が法律上にものをいふ所以である。漫りに法律を變更することは、生活上の習慣を破ることになるから、容易に行はれない。またその法律といつても、すべて常識を以て多くの人に便宜を與へるやうに作られてあるから、四角四面に、なんでもかでも横車を押すやうなことはない。英國の禁煙車に人と乗合はせる。同車中の人が皆喫煙したいと思ふ時は、申し合はせて喫煙する。それを車掌は咎めないといふ。なんとすれば、禁煙の趣旨は喫煙が他人に迷惑を及すことを

拘泥
かはりなつ
むこと

大局
事からの全體
のやうす

遠慮するにある。同車中の人々が皆迷惑しないのみならず、却つて喫煙したいと思ふ場合には、強ひて禁煙の規定に拘泥するに及ばないといふのである。

英國人は理論はとにかくとして、實際の便益に重きを置いてゐる。その實際の便益といふことからいふと、何を捨てても經濟が中心となる。故に經濟思想は、彼等の最も豊富に有するところである。或日本人が英國の學校を參觀して、若い生徒が頗る複雑な經濟上の實際問題を質問してゐたのには驚いたといつてゐたが、一般に英國の生徒等は、家庭その他に於て、常にこのやうなことを見聞してゐるのであるから、少しも怪しむに足らないのである。

かやうに英國人は、萬事經濟を中心とし、徐々に、しかも確實に、大局を見透かして進んで行く性質を持つてゐるから、いかなる事に遇つても、おいそれと乗つて行かない。靜かに考へて進むた

討論
二人以上のものが、或事に
ついて互に論
じあふこと。

雄辯
論ずることに
巧なこと。
論據
論旨のよりど
ころ。

感情の奴隷
理智を失つて
感情に支配さ
れること。

踵を接す
續出する。
人材の輩出
良い人物が
ついで多く出
ること。

類火
後醍醐天皇
卿相雲客

けの餘裕を持つてゐる。あせらない。さうして、容易に逆境に陥らない。若し一朝逆境に遭遇した場合には、堅忍不拔これに堪へ、これに抵抗する力を有してゐる。
ロンドンのハイドパークなどで、雑多な思想家や、宗教家や、その他種々な人の演説が常に行はれる。幾千、幾百の群集は、終始靜かにこれを聽いてゐる。皆が感心したのかと思つてゐると、その演説が濟んだ後で、聽衆の中から立つて、反對演説をするものがある。賛成演説をするものがある。反對また賛成、一場の討論會となることは珍しくない。
社會の上流から下流まで常識が發達してゐて、なかなか人に動かされない。或人がこれを評して、全くこの國に討論が練習されてゐる結果であるといつてゐたが、それも尤もだと思はれる。學校生活の時代から討論を重んずる。討論法の中には雄辯術も含まれてゐるが、討論はどこまでも討論である。道理が明亮で、論

據の正確なことを要する。感情の奴隷となることや、腕力の暴舉に出ることは、勝利を得る所以でない。なるほどこの練習が、國民を通じての一特徴をなすに至つたものと見られぬことはない。
そこで、經濟思想に長じて討論に妙を得た政治家が、後から後からと踵を接して出てくる。英國に於ける人材の輩出は、羨むに餘りある。この方面に長所を發揮してゐる英國は、その反面に於て、學問に凝固まつた天才的人をば、佛獨ほど多く持たない。故に學問は、戦前も戦後もさしたる變化がない。なほかの社會の狀態にさしたる變化がないと一般である。——世界の變遷を見る——
一一 松の下露
さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、いづこを指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町がほど

藤原藤房 忠臣
 藤原季房 藤房の弟
 十善の天子 田夫野人

(三)大阪府南河内郡。金剛山の北麓。

羅穀 (四)奈良縣綴喜郡多賀村と井出村との中間

こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第にわかれわかれになりて、後にはたゞ藤房、季房二人より外は、主上の御手を引さまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二歩には立ちどまり、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座のしとねとし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れ

(一)京都府相樂郡山城大和の國境。木津川の南岸にそびえる



笠置山(田南岳瑋筆)

て、今はいかなる目に逢ふとも逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟もろともに、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと思し召して、木の陰に立寄せりけるを、主上御覽せられて、さして行く笠置の山を出でしより、あめが下には隠れがもなし。藤房卿御涙をおさへて、

給ひたるに、下露のはら、はらと御袖にかゝ

いかにせん頼むかげとて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人、この邊の案内者なりければ、山々峰々のこる所なく捜しける間、皇居隠れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、汝等心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれこの君を隠し奉つて義兵を擧げばや。と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏易くして道の成難からんことをはかりても、だしけるこそうたてけれ。俄のことにて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け寄せまゐらせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。その體たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降せし昔の夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖をぬらすといふことなかりけり。

もだしけるこそうたてけれ
網代
奈良縣山邊郡
朝和村

所從眷屬

(一)足利高氏と大佛貞直。
(二)光嚴天皇。
繼體の君



置山行宮址

この時ここかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは計るに違あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女街に立並んで、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有様なり。十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大将、京へは入らずして、すぐに宇治へ参り向かひて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院新帝へ参らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自

らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄ておき奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、遂にはよもわが國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はんとする爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、言葉なくして退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に、ことかは

袞衣

りて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りに、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、きは紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を悩ませらる。時移り事去り、樂み盡きて悲み來る。天上の五衰人間の一片、たゞ夢かとのみぞ覺ゆる。

天上の五衰人間の一片

一一 懷古

天の河原にやはほろび、
ちよろづ神のかんつどひ、
つどひいませしあめつちの
はじめの時を誰か知る。

天の五衰
依島崎藤村
太平記

眼
生

かんつどふ

大和の國

それ大神の天雲の
八重かきわけて行く如く、
野の鳥ぞ啼く東路の
碓氷の山に登りゆき、

日は照らせども影ぞ

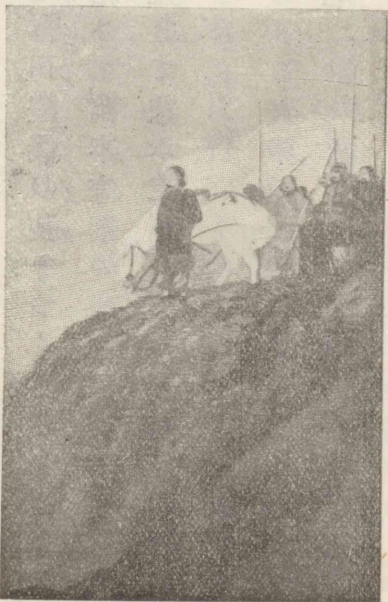
なき

吾が妻はやとこひな

きて、

熱き涙をそゞぎてし

尊の夢は跡もなし。



(筆風草野長)やはまづあ

(一) 持統天皇が大和國高市郡雷山村に於て行幸されし時柿本人麿の詠は天神にまかせば雲のほりせるかもし(萬葉集)

(二) さ、波や志賀の都は荒れにしながらのむかさくらかな(山歌千載集、平忠度)

(三) 高き屋にのぼりて見れば煙たち民のかまどは今ぞ富みぬる(藤原時平の歌)

(一) 大和の國の高市の

雷山に御幸して、

天雲のへにいほりせる

御輦のひゞき今いづこ。

目をめぐらせばさゝ波や

志賀の都はあれにしと、

むかしを思ふ歌人の

澄める怨をなにかせん。

春は霞める高臺に

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ、

消えてあとなき雲に入る。

冬はしぐるゝ九重の

大宮内のもしびや

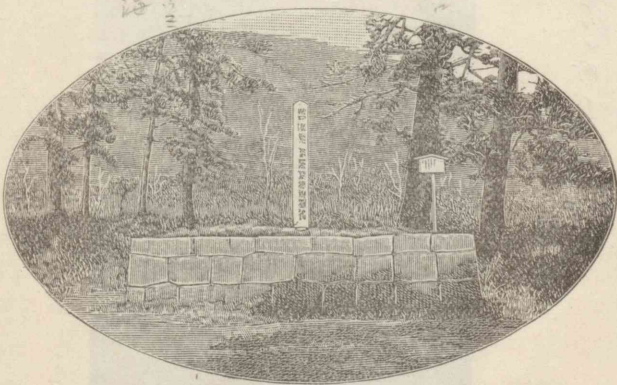
さむきは雪に凍る夜の、
龍のころもは色もなし。

むかしは遠き船いくさ、

人の血汐の流るとも、
今はむなしきわたつみの、

漫々としてきはみなし。

むかしはひろき關原。



關原

つるぎに夢をあらそへど、

今は寂しき草のみぞ、

茫々としてはてもなき。

あれ今秋の野にいでて、

興山高くのぼり行き、

都のかたを眺むれば、

あゝあゝ熱きなみだかな。

— 藤村詩集 —

一三 水の音

相馬 御風

「この間海へ汐水を汲みに行ききましたをりに、妙な経験を一つ得ました。それは私が波間に立つて、自分の持つてゐた手桶で水を汲上げました刹那、その手桶の中の水の、ちやびり、ちやびりと音

を立てたのが、ひどく私におもしろく感じられたことでした。波は可なり高かつたのです。そして、私が水を汲まうとして波間に立出た時には、私は寄せては返す波の騒がしい響の中に居つたのでした。それだのにその騒がしい響の中から、私の耳に自分の汲上げた手桶の中の水の揺合ひ打合ふ微かな音が、はつきり聞えたのです。私は驚かずにゐられませんでした。そして、なるほどここにも波が打つてゐる。ここにも波の音がある。そんなことも、今更のやうに深い興味を以つて考へずにはゐられなかつたのです……。

この頃こんな話をした人があつた。私もなるほどそれはおもしろい経験だつたに違ひないと思つた。大海の水も、手桶に汲上げた水も、同じく水である。大海の波も、手桶の中の動揺も、同じく波である。さうしたことを想像したり、抽象したりして考へることは、私た

真象
二ノ
二ノ
二ノ

如實に
感得す

心境

幽玄

ちにもできる。しかし、さうした自然の現象を如實に自己全體に感得する機會は、容易に得られない。私はその人の経験を貴く思つたのは、その故であつた。殊に大海の波の騒がしい音響の中に立つて、自己の汲上げた小さい手桶の中の水の打合ふ微かな音を聞き得た瞬間のその人の心持は、私にはたまらなく羨ましい氣がしたのであつた。

古池や蛙とびこむ水の音

芭蕉のこの句の意味や、この句を詠んだをりの芭蕉の心境について、古來實にさまざまな解釋が試みられてある。しかもその多くは、この一句の意味を幽玄化しようとして、却つてこの句そのものの眞價を傷つけたり、淺くしたり、低くしたりしてゐるに過ぎない。この句にこめられた芭蕉の心の貴さは、寧ろかうより外に、なんとも表現することのできなかつたところに存する。これ以上、また

これ以外に、一語も、一句も加へることのできなかつた——そこにこそこの句のほんたうな尊さがある。

寂然とした古池に、小さい一個の生けるものが音を生んだ。天地をこめてゐた寂莫が、その小さい一個の生けるものの運動によつて、忽然として破られた。その経験をもとにして、恐らく芭蕉の心には、限りないさまざまな感想が湧起つたであらう。しかし、結局彼にとつては、その瞬間全心全靈に感じた驚が、最初にして最後であつた。彼はその経験から、更にいかに天地の眞理についての冥想に導かれたことであらう。しかも結局なんとかして自己のその貴い心的経験を表現しようとする段になつて、彼はやはり古池や蛙とびこむ水の音と、それだけの現象を如實に歌ふより外に、如何ともすることがで

心的経験

きなかつた。

「結局これだけだ。これがすべてだ。これより外に何も無い。——かう彼は自らも心に叫んだに違ひない。そして、そこにこそ彼がこの句によつて、正風の眼を開いた所以があるのだと思ふ。——野を歩む者——」

一四 みやび

延喜時代の歌人凡河内躬恒は、

てる月を弓張ともしもいふことは

山邊をさしていればなりけり

の歌に天皇の感賞を得た。武人で歌人であつた平忠盛の

ありあけの月も明石の浦風に

波ばかりこそよると見えしか

(一)清盛の父。平三年(一一八二)一三三(一)年(一一八二)一三八(一)年(一一八二)。

(一) 頼光の玄孫。治承四年(一一八四〇年)平氏を討たうと敗死した。年五十一。

面目を施す

(二) 近衛中將藤原

實方。歌人。長

徳四年(一一六

五八年)歿。

(三) 書家また歌人。

萬壽四年(一一

六八七年)歿。

(四) 第八十代。

衛士

寛弘な御徳

(五) 聖武、孝謙兩

朝頃の人。天

平寶字元年(一

二四一七年)歿。

年七十四。

同じく武人で歌の名手と稱へられた源三位頼政の

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

いづれも時にとつての面目を、雲居の空に施したのである。

一條天皇の御世に中將實方卿が一時の感情に激して、藤原行成

卿の冠を打落したが、行成は少しも騒がず、筭を取出して冠を直し

た。天皇は御簾の隙からこれを御覽になつて、行成は心優なるもの

である。實方は陸奥の歌枕見て参れ。とて、陸奥へ遣された。ある歌

枕見て参れとの仰、なんといふ優しいお言葉であらう。高倉天皇の

御代に、衛士が御苑の紅葉を焚いて酒を酌みかはした。天皇は、林間

煖酒、焚紅葉、と白樂天の句を誦して、風流なものよ。と仰せられた。な

んといふ寛弘な御徳であらう。天平十八年正月雪の降積つた朝、橘

左大臣諸兄以下が上皇の御宮に参つた時、おのおの歌を作れとの

仰、思ひ思ひの作があつた中に、橘左大臣は

降る雪のしら髪までに

大君につかへ奉れば

たふとくもあるか

林間と歌つた。白髪のお老臣が君恩を喜

んだ有様が、目に見えるやうで、君

臣和樂の親みが思ひやられる。

南殿の花の宴を始として、雪の

葉、且、月の夕べ、天皇が群臣を召して

詩歌管絃の風流を盡させられた

ことは、中古時代の常であつた。九

月十三夜の後の月を賞することは、宇多天皇の御世から始つたと

か。まして南殿の花の宴、をりをりの舞樂の花やかさ、さら、かさは



(一) 第五十九代。

雅懷

想像するに餘りある。後醍醐天皇が吉野山に雲居櫻を御覽じて、
 ここにても雲居の櫻咲きにけり、
 たゞかりそめの宿とおもふに
 と仰せられた御雅懷は、聞く我等には悲憤の涙も添ふ心地がする。
 歴代の天皇が風雅韻致に富ませられ、殊に和歌に堪能でいらせら
 れたことは、世界各国の帝室に例のないことであらう。
 和歌はわが國固有な文學で、上下幾千載の歴代の文學を縦に貫
 き、横に貫いて居るものである。漢文を主とし、漢詩を作ることの太
 いに行はれた時代でも、和歌は固有な文學として常に行はれた。延
 喜時代に始めて古今集の勅撰があつてから、續いて後撰、拾遺と鎌
 倉の始頃までには八代勅撰集が、院宣或は勅命によつてでき上つ
 た。承久の役の三上皇后鳥羽、順徳、土御門は殊にこの道に堪能でい
 らせられた。敷島の道といふ名稱もこの頃から起つた。和歌を日本

三上皇后鳥羽の口より
 つまらぬと
 を
 八代勅撰集
 後撰
 拾遺
 金葉
 詞苑
 千載
 新古今



尾形三月筆 忠 度

八代勅撰集
 後撰
 拾遺
 金葉
 詞苑
 千載
 新古今

行まじし木
 花とせは
 一ノ谷
 四年一ノ谷
 戦死した
 俊成卿の門を
 叩いたことは
 本書卷七第二
 二課に詳しく
 見えて居る。
 (二)歌人。建仁三
 一年(一八六四
 年)歿。年九十
 四。
 公家
 列聖

固有な道と稱へたのである。勅撰集の撰集があつたことは、朝廷と
 和歌とに少からぬ関係を有せしめた。一首でも勅撰集に採られる
 ことを非常な名譽と感じた。もともと古來の忠君心から出たので
 はあるが、撰集に入つて歌名を後世に傳へることは、武人が戦場の
 功名よりも一層な名譽であつた。平家の都落の際、平忠度が途中か
 ら引返して、夜千載集の撰者であつた俊成卿の門を叩いてその歌
 集を託し、死後一首にても入選の榮を得しめ給へと頼んだのは有
 名な話である。勅撰集は二十一代集までを數へて、その後は絶えた
 が、天皇をはじめ奉り、攝關以下公家の人々は、代々皆歌の嗜があつ
 た。皇室と和歌實に離るべからざる聯想がある。萬世一系の皇統、太
 古以來の文學、列聖の御歌、和歌に伴なふ歴代の佳話、これ等は皆わ
 が國の古代を思念せしめるものである。百人一首の歌ガルタが、永
 く弘く國民の間に喜ばれるのも、ここにその意義がある。

國學

吐露す

借月照
有職
武家時代に生まれた人々も、皆みやびの心をもつて朝家を仰ぎ、
古代に憧憬したのである。みやびは宮びで、宮中のふりといふ意義
である。

一たび古代の語に綴られた三十一文字の音響に觸れ、ば、思は
遠く平安時代の昔に遡る。徳川時代に入つては、歌學の研究は進ん
で國學となつて、大いに忠君愛國の思想が鼓吹されることとなつ
た。幕末勤王の士は皆和歌を口ずさんで、その忠君愛國心を吐露し
た。かくして皇室は道德の本源であらせられたばかりでなく、また
風流文雅の中心であらせられたのである。文藝ばかりではなく、音
樂、禮儀一切の有職の淵源であつたのである。兵馬の權が武門に移
つて後も、一切の名譽、光榮の中心は朝家にあつたのである。
武家時代に生まれた人々も、皆みやびの心をもつて朝家を仰ぎ、
古代に憧憬したのである。みやびは宮びで、宮中のふりといふ意義
である。

一五 渡鳥

吉江喬松

(一)共に東京市
の區名で、い
はゆる山の手に
と稱する高臺
にある。

(二)共に牛込區
にある。

大つ風ふけ
族の手に
おんあめす
おんあめす

十月の下旬から十一月の中旬まで、渡鳥の群が東京の空の上を
騒いで過ぎることがある。曇日の夕方、或は雨の少し降る日など、牛
込や小石川邊の高臺の森の上に、幾百ともなく群鳥が喧しい聲を
立てて、舞狂つてゐるこ
とがある。赤城神社の森
築土八幡の森などは、こ
れ等の鳥の群集する場
所となつてゐる。



(筆堂湖崎岩) 枯木

高い見わたしのきく丘へ登つて、西の方を眺めやつて見給へ。幾十
の群鳥が、輪を廻がき、線と伸び、昇りつ降りつ、一團の黑影と密集す
るかと思ふと、忽ち散つて萬片の木の葉の空に舞ふ如く曇つた空
の灰色雲を背景にして、さまざまな行動をしてゐるのである。或時

(縫)

長驅懸軍

〔Jerusalem, 地中海の東岸なるパレスタインの都。キリストの墓がある。〕

は森の中の一本高いもみの樹の枝に、二三羽の鳥が止つてゐると、その周囲を、幾百の渡鳥が群をなして、隙間もなく攻寄せ、或は遠く取巻き、或は近く迫り、その羽叩きと鳴聲とで、鳥を威嚇してゐる。鳥は逃損じた武夫の如く、攻圍軍に攻立てられて、懸命になつて枝に取りすがつてゐるばかり、翼ををさめて、鳴聲すら立て得ない。

これ等の渡鳥は、嵐に吹きまくられてか、木の葉に包まれてか、一群また一群と、都の空から消えて行つてしまふ。そして、十一月の下旬になると、大方その姿を見かけない。

あゝ、長驅懸軍、彼等は何處を指して行くのであらう。彼等の行く所木の葉は空に飛び、彼等の過ぎる時嵐は後方から追ひかけてくる。雲に包まれ嵐に打たれても、行くべき方まで行かねば止まない。一團一團、群れつ散りつ、次第次第に空を掠めて過ぎる。暫し立止つてその行方を目送し給へ。海に、陸に、一隊また一隊、遙か遠く、^(一)ジェル

〔一〕ヨロップ人が、^(一)サレムの聖地を異教徒たるトルコ人から奪ひかへす爲に起した戦役。郊。東京市の西北

サレムの淨地へ向かつて出發した聖十字軍の姿を思ひ浮かべずにはゐられまい。

或夕方、私は戸山の原へ出て、草の深く茂つた丘の上へ登り、入日の後の鈍色の雲を眺めて立つてゐた。すると、不意にけたまひい音を立てて、空を鳴きつれて行くものがある。驚いて見上げると、幾百の群鳥が一團となつて、空も黒くなるばかりに連なつて行くのであつた。それも私の立つてゐる丘から、さまで遠くない空の上であるから、羽音まで明らかに聞えて、怖しいくらいであつたが、ふと氣がつくと、私が立つてゐる叢の中へ、何か空からほたんと落ちたものがある。草を分けて見ると、紅の木の實が一つ落ちてゐた。今過ぎて行つた渡鳥が、どこかの森から啄んで來たものを、過つてこの草原に落したのかと思ふと、はぐれたる木の實よ、漂泊の鳥の翼に乗つて、何處の森より來りしぞ。といふやうな、何か不思議な感じが

(黍)

した。その實を拾つて鳥の行方を見ると、その影は次第次第に幽か
 になつて、入日の雲の微かに明るい地平線に没してしまつた。
 その渡鳥が過ぎた翌日であつた。夕嵐が烈しく起つて、原を吹き、
 森を吹き、枯草を飛ばし、僅かに残つてゐた木の實をもぎちぎり、雲
 の中から霰がたばしつて來た。もう秋の終り、けふよりは冬の領ぞ
 といふやうに感ぜられた。私はまた一人嵐に吹かれながら、野路を
 たどつて行つた。きび穀の束ねたのが吹飛ばされ取残されて、唐辛
 が赤く畑に晒されてゐた。昨夕の丘へ登つて見たが、たゞ荒涼たる
 灰色の雲が見る見る空の上に廣がつてくる。
 あゝ、愈冬になつたのか。
 華やかな夏が寂しい秋に遷つて行く時は、ものの隈、日の影など
 に、それとなく人の心に知られるものであるが、秋が冬に更る時は、
 心を注いでゐないとわからない。渡鳥の最後の一隊、これが即ち秋

好個

慄悍

の殿軍である。きのふの夕方鳴きつれて過ぎたのも、この冷たい嵐
 を人に告知らせる爲であつた。あゝ、殿軍の一隊よ。汝等の過去つた
 後、世は氷雪の領となるのである。
 冬になつてから、ともすると一日二日、拾物をしたやうな暖かい
 日がある。かやうな日、前庭の南天の紅い實などに、ばさりと鋭い音
 を立てて降りるものがある。見ると、それは百舌で、身の引緊つた、翼
 の先の切れとがつた好個な戦士の姿をしてゐる。その嘴は短く尖
 つて、眼は爛々として輝き、降りるとまづ四邊を警戒する。これは渡
 鳥のはぐれものである。肉食鳥には常に戦ふべき敵がある。餌食を
 求めるにも、まづ敵に意を注がなければならぬ。爛たるその眼、凜
 たるその聲、慄悍の氣は細い身内に充ち満ちてゐる。庭前に降りた
 一羽の百舌、汝は落武者である。落武者なればこそ一層周圍に氣を
 配る必要がある。恐る恐る南天の葉を動かして、紅の果實を啄んで

ゐたが、忽ち何物に驚いたのか、きゃーと一聲長く引いて眞直に舞上り、土塀を越えて、姿は見えなくなつてしまつた。落武者の身は何處を指して行くのであらう。――若き自然――

一六 禁庭の野分 (昭憲皇太后御作)

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕星の光も見えず。とかくするほどに雨いたく降出でて、ほとり近く語り合ふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、いかづちさへ鳴りはたゞきて、夢うつゝとも思ひ定むるひまなく、稻妻のきらめきわたる、いとけうとし。曉方には雨はをやみぬれど、風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとど目もあはず。上には民の爲とて、畏くも遠きさかひに出でましたるほどなれ

朝露のひるまはさしもなかりし空

鳴りはたゞくけうとし

(一)明治十四年明治天皇東北御巡幸

(一)英照皇太后

ものむづかし

千町田



昭憲皇太后

ば、いかなる行宮にましまして、この風の音に御心を悩まし給ふらん。皇太后の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひつゞくるほどに、夜もあけぬれど、未だ風静まらで、いづこもおろしこめたる、いとものむづかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階のものと、のばせをも、筒井の傍なる柳も皆折れふしぬ。今をさかりなりと見えし眞萩も、名残なく散亂れたる、いと寂しく見ゆ。宮のうちだにかく荒れぬるを、まして怪しげなる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべて實のりよじと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつ

しなとの神
吹かなん
おちるる

(一)近江國滋賀郡。
琵琶湖の西岸。

らんやなど心にかゝりて、
國のためしなとの神も心して
いなばの上はよきて吹かなん
なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく静まりて、日影
まばゆく雲間にさしいでぬるに、自ら人の心もおちるにけり。

一七 秋の歌、冬の歌

源 俊 頼

うづら鳴く眞野^(一)の入江のはま風に

尾花なみよる秋のゆふぐれ

藤 原 俊 成

ゆふされば野べの秋かぜ身にしみて

うづら鳴くなりふかくさの里

よみ人知らず

みどりなる一つ草とぞ春は見し

秋はいろいろの花にぞありける

壬 生 忠 岑

山里はあきこそことにわびしけれ

鹿のなく音に目をさましつゝ

大 江 嘉 言

山ふかみおちて積れるもみぢ葉の

かわける上にしぐれふるなり

藤 原 資 宗

いかだしよ待てこととはん水上は

いかばかり吹く山のあらしぞ

香 川 景 樹

(一)歌人。古今集
撰者の一。

(二)對馬守。歿年
不詳。

(三)參議資房の男。
四位少將。

(四)歌人。天保十
四年(二五〇
三年)歿。年
七十六。

照る月の影のちりくる心ちして
よる行く袖にたまる雪かな



香川景樹筆蹟

月前郭公
さやかなる
月のたに
もねられたに
を山ほととぎす
りす鳴夜な
りけり
景樹

津の國のなにはの春は夢なれや
あしの枯葉に風わたるなり

西行法師

一八 實體實相

松浦

すべてものの實體實相は、全體を解放したところにある、區別を超越したところにあるありまして、それから生じてくる實體實相の威嚴は、想像するに難いことではありませんが、その例證に、私が非常

におもしろく感じた和歌の話を舉げて見ませう。

長野義言の「歌の大武根」に、或尼が盜賊にしばらくながら和歌を詠んだところが、盜賊はその和歌にひどく感動して、奪つたものまでも返して、逃げてしまつたといふ奥ゆかしい話が書いてあります。

近き頃彦根に、慈門といへる尼若くて世を遁れ、里根といふかはしなる所に庵を占めて住みけるに、一夜盜人ども忍び入りて、尼をからめおき、ものなど奪はんとせしに、尼からめられながら詠みける、

よし垣ももとは難波のあしなれば
こすもことわりよるのしらなみ
この歌を聞きて、盜人ども尼をゆるし、物皆返して出でいにけり。
意は、世を遁れ來て棲める庵のよし垣も、元は難波の浦に生ひた

(一)伊勢の歌人。
彦根侯伊井直
彌に擲用され
た。文久二年
(二五二年)
歿。年四十八。

(詩)

る蘆と同じ類のものなれば、今宵しも白浪の越えて入りしは理
なりか、れば身は遁れても、世を隔つる垣はなきぞと感じあき
らめたるを、情深くあはれにいひなしたるにて、これも詞には盜
人すなといへるならねども、同じ世にふる人なればいかでか感
じ實にもと思ふ心なからん。この白浪は盜人のことなり。

日本文學に歌の徳が靈妙な力を現すといふ話が澤山あり、また
これを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔から文學に一種
の神性を感じ、そこに靈的な意味を理解することが一般にできて
ゐたといふことを示すものでありますから、この點だけでも、文學
的に日本人は世界に誇ることができるのであります。それは文學
といつても歌にとゞまるではないかと、いふ人があるかも知れま
せんが、詩歌は文學の眞髓であります。歌についてこれだけの感得
が自由にできれば十分であります。この點については、明治に始つ

眞髓

純
は
ま
ま
の
心
を
こ
ろ
に
こ
め
て
お
も
ひ
を
こ
め
て
お
も
ひ
を
こ
め
て

俳句小説

心
の
こ
ろ
に
こ
め
て
お
も
ひ
を
こ
め
て
お
も
ひ
を
こ
め
て

朴直

遜色

俗縁に繋がる

た新日本の日本人は、却つて舊日本の日本人よりも、文學的に墮落
して居りはしないかと思はれます。理窟をいふことを知らずして、
率直にももの精神に觸れることのできたのが舊日本の特色であ
ります。理窟をいふことは巧になつたけれども、朴直と深切と、隨つ
てももの精神を眞に感じ、全心を傾注して事物を尊敬し崇拜する
ことができなくなつたのが、新日本の遜色であります。
さてこの歌の貴いところは、限界が固まりついてゐる浮世の垣
を、そのままに僧庵の周圍に取周らしたものであるから、俗縁を斷
つたと思つてゐた身でも、やはり俗縁に繋がれてゐた。俗縁に繋が
れてゐるものが、俗縁で盜賊にはいられても、いたし方ない次第で
あると悟つたその一つの悟にあります。この悟にはいつてしまへ
ば、垣を結んだのがすでに誤である。尼は縛られても盜人を怨まな
い。また盜人に盜みをするなど訓戒もしない。その怨まず、戒めず、自

心の垣を撤す

己の心の垣を撤して區別もなく、區劃もなく、一切を解放して分つこともできず、集めることもできぬ自分といふものの實體をなげだしたところに、賊を威壓し、私たちを威壓する力が生じて來たのであります。かういふ例は、たゞ歌の徳といふばかりではありませうから、高德な上人の間には、これに類した話は澤山にありませうが、要するに、一切のものが、この實體實相と威嚴との境涯まで行かなければ、未熟でなければ虚偽であると思ふのであります。

—文學の本質—

自修文

一九 小兒の世界

西條 八十

「子供が常に悦ぶところのものは、未知の世界への遠征である。」とアンドル・ラングはいった。全く子供と遊んでゐていつも驚かされるのは、彼等の觀察が、空想が、私たちには全然未知な、想像

Andrew Lang. イギリスの文藝批評家。西曆一八四四年—一九一八年。

歳晚年のくれ。

(一) 東京市神田區交叉點くちがひになつてゐる所。

街頭町の通路。

(二) Papa. 父。

師走十二月。繁劇いそがしいこと。

だに及ばない世界へ常に飛翔してゐることである。

歳晚のことであつた。私は四歳になる女兒をつれて買物に出かけた。くさぐさの買物を濟ませて電車に乗つて、ちやうど小川町の交叉點に來た時電車は何かの故障で、暫時そこに止つてゐた。

女兒はその時窓の硝子越しに賑やかな街頭の景色を眺めてゐたが、突然叫び出した、

「Papa. お蜜柑。お蜜柑。」

私は子供の眺めてゐた窓外に眼をやつた。そこは師走の、しかももう二三日で年が變らうといふ押しつまつた繁劇と雑沓との巷である。

大小の商店は華やかな萬國旗、豆提燈、だんだらの幔幕などで競つて店頭を飾りたて、賑やかな樂隊で景色を添へてゐる。めいめい春のしたくらしい大きな買物の包を持つた男女老

右往左往す
あちらこちら
に行きがちがふ。

左顧右盼

左右をみまは
入るべくもな
いはいりさうで
もない。

模索する
さがしとめ
る。

視野

頭も眼も動か
さずそのま
で見える面積
視野に入ると
は目に見え
ること。

幼が、人道を、車道を、肩摩らんばかりにして右往左往してゐる。その間を危くも縫つて疾走する電車、自動車、自轉車……
「わが子はめまぐるしい雑沓のどこに、蜜柑を見出したのであらうか。」
さう思つて、私は頻りに左顧右盼した。けれども終に見當らない。向側に青物店はあるが、それは餘りに遠くて、子供の眼に入るべくもない。
「どこに。どこに。」
模索する父親を嘲けるやうに、子供は叫びつゞける、
「パパ、お蜜柑、お蜜柑。」
暫く彷徨つてゐた私の眼が、ふと地上の或點に向けられた時は、たと視野に入つたものがあつた。なるほど蜜柑だ。たつた一つの小さい蜜柑だ。誰人かのさげた籠からこぼれ落ちたものらしい。ちやうど電車の鐵路が交叉した石疊の上に、ちよこなんとしてゐた。

てゐた。

「ふむ、あつた。あすこにお蜜柑があるね。」

といふと、子供はさもわが意を得たやうに微笑した。

肩摩鞞撃の巷、しかも師走の心をざるな行人の足下に落ち散

つてゐる一顆の蜜柑——誰人にも忘れられたこの世界の一劃

を靜かに見つめてゐるところに、兒童の不思議な生活がある。さ

うして、この一劃の世界こそ、我々成人がすでに遠い昔に失つて、

終に奪回し難いものなのである。

これと同じやうな例を、私は或秋の日に經驗した。

その日もやはり私は幼い女兒の手をひいて、山の手の町を散

歩してゐた。さうして、ゆくりなく或貴族の宏壯な邸宅の前に出

た。大きな門扉が開かれてゐた。前庭に敷きつめられた玉川砂利

を通して、奥に美々しく巍然とした洋館が見られた。

私はこの堂々たる大廈が、幼兒の頭にどんな印象を與へるか

わが意を得る
満足する。
肩摩鞞撃
人や車の往來
のはげしいこ
と。肩がすれ
あひ、車の軸
のうちあふ義。

山の手

東京市で下町
に對して四谷
牛込、小石川
などの高臺な
いふ。
玉川砂利
東京府と神奈
川縣との境な
川縣と多摩川
流れる多摩川
石からとれる小

大廈
大きな建物。

全郭
構のうち全郭。

(Solomon.)
昔のヘブライ
の王で、ジェ
ルサレムに美
しい神殿や宮
城を造つた。
小さい神
小兒ないふ。

を知りたいと思つた。そこで指さしながら、「×子、これはなあに。」ときいて見た。ところが意外にも、幼児はこんな答をしたのである。「花。」とたゞ一言。誰人に於てでもあらう如く、私はこの返答にびつくりした。少くとも「お家。」とか「お寺。」ぐらゐの答を豫期してゐた私は、そこで今更のやうに、私はその邸の全郭を見直した。さうして、はたと真相を知つた。最前にもいつた前庭の奥に聳えた洋館、その入口近くに薄紅の芙蓉の花が、午前の陽を受けて、優しく咲いてゐた。私は愛兒の頭を撫でながら、ソロモンの榮華ならぬ高閣の誇の、この小さい神の前に於て、終に一莖の花の美にだも如かない。

(一)西條八十の隨
筆集。大正十
四年一月東京
新潮社發行

ことを、しみじみ感じたのである。

——詩作の傍より——

二〇 常に新しいといふこと 田山花袋

新しさに向かつて波打つ心は、どんなにいろいろなものを浮かび上らせるだらう。そこには自分ばかりが味はふやうにできてる樂しさもあれば、限り知られぬ不可思議に對する恐しさもある。美しい花も咲いてゐると同時に、凄じい嵐も潜んでゐる。暗い影もある。麗しい光もある。絢爛な更紗模様に似た美しい人の情もあれば、繪具をそのまま、そこにあげたやうな若い心の姿もある。新しさといふことの樂しさ。それを思つただけでも、誰でも心の心が微かにふるへずにはゐられないでせう。何も考へるには及ばない。何も恐れるには及ばない。新しさといふ心の旗と、眞面目さといふ意志の劍とをかざしてゐるさへすれば、

前途洋々

それで何も憂へることはないのである。前途は洋々として春の如しである。

新しさからあらゆることが始まる。新しさには力がある。湧出して湧出しても盡きない力がある。常に新しければ、常に心が活動してゐる。決して倦怠を覺えない。古人が汚れたら衣を洗ふやうに常に心を洗濯することが必要であるといつたのもそれである。私は常に新しいといふことを祝福したい。

二 私は自然を禮讚する 野口米次郎

私の自然禮讚は富士山で始り、富士山で終つてゐる。顧ると、私の詩界に於ける旅は短いものでなく、數へるとすでに三十年にもなると、^(一)旅に病んで夢は枯野を駆けめぐつた芭蕉のやうに、時と所とを

禮讚

^(一)「旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる。」
(芭蕉)

^(一)三重縣四日市

問はず、私はいつも始めて富士山を見上げる少年にたち返り、麗しい曲線をぐつと曳いた裾野を駆けめぐるといふ言葉は穩當でない。私は裾野に起ち、富士の尊い圓錐形を眺めて禮拜する。

私は見すばらしい田舎の一少年として、始めて船で四日市から東上する朝、海上から富士山を眺めた。あゝ、その時……寒風肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讚の幕は切つて落された。私はこの壯嚴無比な神の表象を始めて見て、かつ恐れ、かつ敬つた。私が若しこの時富士山から詩の暗示を得なかつたならば、詩人として私の人生は開かれて居らなかつたかも知れない。私の自然禮讚は、富士山で始り、富士山で終つてゐるやうに、私の詩人生活も、富士山で始り、富士山で終つてゐる。實際、詩人の一生は、自然禮讚の四文字に盡きてゐる。

第一印象

(一) 神奈川県三浦半島の東端

滂沱

詩人として私はいつも第一印象の心理状態に支配される。自然の現象もそれがいかなるものであらうとも、自分の特殊な身振(恐しい、或は懐かしい)をして見せるのは、私どもが始めて接する刹那に於てだ。私は十六歳の時始めて富士山を見た以来、今日に至るまで、幾たび富士山の靈姿を、近くからまた遠くから眺めたか知れない。四年前の渡米の際のことだが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、暮色が波の上に落ちはじめ、薄い灰色の暮色がだんだんと濃くなつて行つた。甲板に立つて見棄てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つてゐるものがある。……幽靈か。さうでない。紫色に空をくつきり染抜いた富士山の圓錐形だ。時も時であるが、私はこの時くらゐ遺瀨ないもの寂しい孤獨の感にうたれたことはなかつた。私は聲こそ出さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。またこの時の富士山は、悲哀の靈域に入つた美の極致を暗

示する世に尊い姿であつた。しかし、私は目をつぶつて心の中で富士山を忍がく時顯れて來る姿は、私が十六歳の時に始めて接した富士山である。私は長い年月を外國で費したものだ、私の勇氣が急に挫けた時、我はお前を守護してゐる。恐れずに起てよ。起つて天空高く上らねばならない。」と私に勢をつけてくれたものは、その富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて、自分の進むべき道を知らなかつた時、我はお前を導いてやる。道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く。そこには神聖な空氣が満ちる。お前は復活せねばならない。」と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。「我は階段となつてお前を天に上らせよう。」
 「我はお前に教へて神秘の門戸をあけさせよう。」
 「我はお前を導いて祈禱の殿堂にはいらせよう。」
 と語つて、私の守護神となつたものは、私が始めて眺めた富士山で

あつた。私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少くとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理解して、詩歌の道を歩くことができた。私はこれを喜び、これによつて生きて來てゐる。

私はここで私の忘れることのできない一挿話を語りたい。時は二十一二年前で、場所は驚くべき冬の霧が、しやちか鮫でもあるやうに跳り迫るといふロンドンだ。私はこの薄氣味悪い、地獄の何町目かとも思はれるロンドンの町中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながら、うろつき廻つた。或一夜、詩人ビンヨンに伴はれて、詩人でもありまた美術家でもあるスタージュームの招待會へ出かけた。その晩も私の心は暗かつた。冷たかつた。ビンヨンの言葉で出かけるには出かけたが、私には談話する勇氣さへもなかつた。私の詩を認めてくれない英國に對し、激烈な反感

(鮪)

(1) Binyon.
イギリス人。

(2) Sturge Moore

(鮪)
(諸子)

沽券にかゝは
る
(一) 葛飾北齋。浮
世繪師。嘉永
二年(一五〇
九年)歿。年九



感じた、我を見て起て。西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せ

二一 私 は 自然 を 禮 讚 する

九五

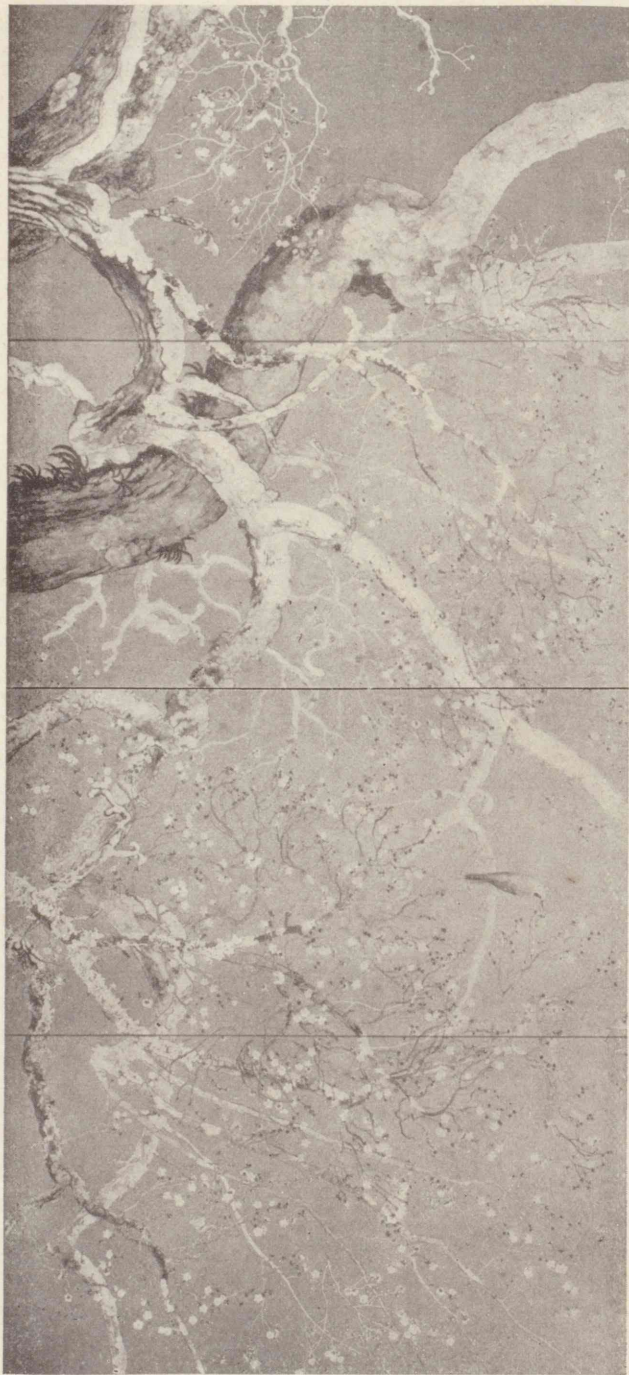
を持つて居つた。ムーアの宅に着くと、部屋にはすでに澤山なお客が集つてゐて、談話は岸を打つ海の潮の聲のやうに高まり、部屋の中はロンドンの夜のやうに煙草の煙で濛々として居つた。無名な私は、宛もはえか、もろこのやうに、客と客との間を寂しく獨り泳ぎ、我ながら勇氣がなく、日東男子の沽券にかゝはると思つた時、私は快ふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士を見た……凱風快晴の一枚だ。代赭色の圓錐形を堂々と兀立せしめた木版繪だ。私は富士山が語るやうに

よ。恐れてはならない。慄へてはならない。我はお前に命令する、勇氣を出せ。私は直ちに生氣が五體を震動させるやうに感じた。私は直ちに多辯になつた。私は直ちに快活になつた。その時からロンドンの澁面は笑ひ始めた……私の詩集も世に出るに至つた。私は英國文壇にうち勝つた。私はどのくらゐ富士山に負ふところがあるか。知れない。實際私は富士山の守護で、少くとも詩人としての人生を開拓して來たといつても過言でない。私が英國での第一詩集、東海よりを富士の靈に捧げたのも、當然私が拂はねばならない敬意の一端を表示したものに外ならない。

二二 春立つころ

金子 薫園

寒は今最中なり。空晴れて風なく、陽は明らかに照れども、外氣凍りて觸るゝところ刀の如く人を刺す。深沈として動かざるものあ



梅の花

老いたる梅

権威

翫賞

荒寥

り、人の腸を寒うし、また清うせしむ。晶然として咲出づる白梅は、寒の生める花なり。一朵の花庭の冬枯を領して、地上の權威なり。梅のおもしろみは孤高なるところにあり。その一本の離れたるところにあり。これを聚めて林をなし園をなして、いはゆる風流人の翫賞に供するに至れば、この花の生地は奪はれたるなり。冬枯の野を行きて、はてしなきその荒寥に倦める時、一木の瘦梅白く香を吐きて、ゆくりなく人に迫るを見れば、心寒うして往く。森かげの土藏のあたり、かじけながら花を着けて清香を送れるは、人をして繪の如く快感を覚えしむ。おあつらへ向の景色の中にはめて愛づる風流人に依つて、この花久しく俗化せられたり。空碧く瑠璃色に晴れわたりて、地上は風強く吹き、家々の瓦の屋根より屋根に白き埃の飛ぶを見るは、哀しき對象なり。汚れたる硝子の窓越に眺めて、眼痛き心地す。隙間もる埃の風、時に火鉢の灰を

(終)

起たしめ、読みさしの書のページを翻す。温室ひつろ咲の菜の花、瓶に挿したるまゝ、幾日をか経けん。火の氣少きも室内は室内なり、花ほうけ、葉は黄に枯れたれど、なほ温かき春色を殘せり。自然の春未だ來らずして、室内の春はすがれんとす。

福は内、鬼は外、ひゞらぎの葉に寒氣を逐ひやりて、立春來る。青く透徹れるが如き空の色稍和みて、眼自ら高きに親しむ。晴つゞきて、草ほのかに萌ゆるさまを面影にすれば、忽ちにして雷鳴り、みぞれ來り、春寒肌に徹す。雪白く積みて、春の行きわたらんとする道に塞がる。春の光を浴びて、いろに飾られんとする市街美は、たゞ一色の白きに劃られぬ。

しかも春はすでに至れるなり。地の底より上らんとする一道の温氣は、淡く雪を敷かしめて、やがて溶かし行く。雪解のあとの木の根などに萌出でしふきのたう、青く鮮かに見ゆ。喘息に悩みし祖母

(美)

渡莫

今めかす

春たつころ
草あはく青
める野へに
けふもまた
しきりに春
のなかに
をみぬ
燕園

(一) 神田區にある
天皇の御宇と
かや(芭蕉)

の爲に、殘雪を分けて漁りし幼き日を思ふ。
紅梅の花の色は温かうして親しむべし。さはれ、春や昔の名残を留めて今めかす。新人の背景に副はぬ色香なるべき。洛外などのある築土の壞れに、薄き陽の光を受けて行人の思を惹く如き所にこそ、この花の興はあるべけれ。



蹟筆園燕子金

草青く萌えて、水日毎に温む。野にたゞずみて杖を立つるに、春の氣の地の底より傳はり來るを覺ゆ。柔かく暖かき思は、この刹那人の胸に運ばる。

桃の節供に近く各地に雛市開かる。東京の十軒店(じゅうけんてん)は古くより聞ゆ。雛の如く美しき兒の目につくはこの頃なり。人形天皇の御宇の

華やかさは漸く表れ來れるなり。日麗かにして、大路の青柳の絲次第に伸ぶ。...

二三 女流の俳人 荻原井泉水

女流の俳人は古來甚だ少い。芭蕉の時代には乙州の母の智月尼、去來の妹のちね、凡兆の妻の羽紅など、七部集の中にもその句が見えて居るし、伊勢の園女や、加賀の千代女や、江戸の秋色女などは、逸話などを以てその名が著れて居る。これ等の女流を一家として見ると、さして秀でた人はないやうであるが、女は女だけに感情の調子が柔かくて、潤がある。それは枯木に時雨の音を聞くやうな閑寂な趣味を貴んだ昔の俳句の中にあつて、殊更珍しく、寒椿の一二輪を見るやうな氣がする。...

[Type]

七部集
芭蕉の妻
凡兆の妻
羽紅
ちね
園女
加賀の千代女
江戸の秋色女

織細

織細で、若くて佳い句を残して若くて死んで行く人である。ちねも三十にならずして死んだらしく、文政年間の花讚女も二十三で死んだ。他の一つは、夫に別れてから孤獨の心を俳句で慰めて、隱遁的に安住したり、または髪を落して尼になつたりして、心持も男性に近く變つてくる。このタイプの人は皆長生をして居る。園女は七十四、智月尼も同齡、千代女は七十五、捨女は六十五、多代女は九十歳までも生きた。

(一) 俳人斯波一有の妻、享保十八年(一七三三)歿。

園女は伊勢の松坂の人で、晩年芭蕉がその家に立寄つた時、白菊の目に立てて見る塵もなし。といつて賞讚した句で見ると、いかにも貞淑な清艶な婦人であるらしく思はれる。...

生業

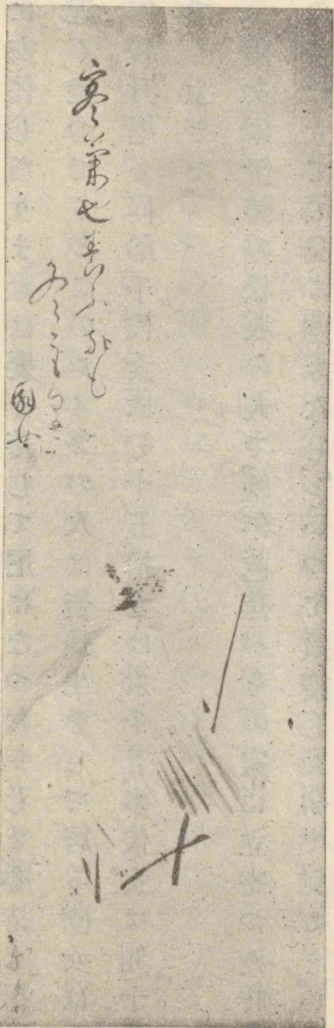
中の菌にあたつて、大阪に来てから發病して、遂に世を去つたのであつた。師を思ふことに厚かつた園女の悲嘆と悔恨とが思ひやられる。その後、園女は江戸に出て深川に住み、眼科醫を生業とした。また禪を學んで智鏡尼と名を變へた。剃髪をした頭上にわざと十本

寒菊や養ふ

我も冬こも

り

園女



園女筆蹟

逸脱

許の髪の毛を残して置いたといふのでも、晩年には餘程逸脱して、女ばなれがしてしまつたやうである。平間（一）の遺骸は大阪から川船で天津の乙州の家へ届けられた。法

芭蕉の遺骸は大阪から川船で天津の乙州の家へ届けられた。法

あき入にと

んとめいた

り小鳥とも

智月



智月筆蹟

衣芭蕉の好みとあつて、特に茶色の布を選んだのが智月尼であつた。芭蕉は嘗て智月尼から記念の書を乞はれた時、六十に近き人に形見を乞はれていとかなし。我先に死ぬといふことにや。と戯れながら、書いて與へたといふ話もある。

山ざくら散るや小川の水車

雲のまの星見てゐるや時鳥

智月尼の句には美しい繪畫がある。

秋色は江戸照降町の菓子屋の娘であつた。十三の時、上野の花見に来て、井戸端の櫻あぶなし酒の酔。といふ句を詠んで、俄に名高く

(一)其角の門人。名は秋。享保五年(二三八)卒。年五十七。

(二)日本橋區。

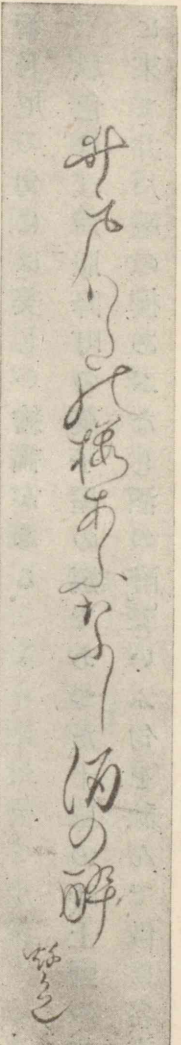
対象

なつた。その対象になつたといふ櫻は、今も清水堂の裏手に秋色櫻として残つて居る。

底白にべにはきのこすつゝじかな

すゞしさや日の落ちかゝる海の上

などが、この人の句として推すべきものであらう。捨女は丹波柏原(一)の人で、六歳の時に「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」といふ句を詠んだといふほどだが、その作風は、



蹟筆 秋色



蹟筆 女捨

(一)元禄十一年
(二)三五八年
歿。年六十四。
(三)氷上郡。

おもふ事な
き顔しても
秋の暮
ステ

(一)揖保郡。
(二)...

うきことになれて雪間の嫁菜かな
といふ風で、女らしくはあるが、句としては感服ができない。この人も剃髪して、播州の網干(一)に庵を結んで、長生した。凡兆の妻の羽紅は、霜やけの手をふいてやる雪まらげ縫物や着もせでよごす五月雨

などで見ると、良妻賢母らしい。當時の女流俳家としては、なんとしても加賀の千代が傑出して居る。千代の句には、女らしい優しさが生きて居る。蝶々や何をゆめみて羽づかひとぼし灯の用意や雛の臺所夕顔やもののかくれて美しきかういふ句には、どうしても男には詠まれない女性獨得な境涯が

ある。しかし、この優しい感情が、動もすると女らしい小心や、女らしい注意となる。

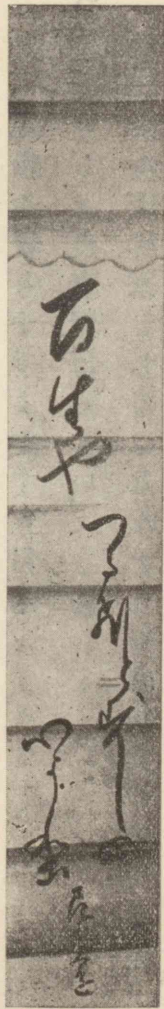
白菊や紅さいた手のおそろしき

根をつけしをなごの慾や葦草

それがまた神経質過ぎる思ひやりともなる。

百生やつる
ひとすしの
心より

尼素園



千代尼筆蹟

朝顔につるべとられてもらひ水

これは千代の名と共に普く知られて居る句であるが、どうも優し過ぎて、この優しい氣持を見て下さいといふやうな誇張の見えるのが厭みである。

千代は松任の産で、幼少の時から句を好んだ。支考の門人盧元坊

(一)石川縣石川郡
金澤の西南三
里餘。
(二)姓は各務。俳
人の芭蕉十哲
の一人。享保十
六年(一七三九)
十一月。年六
十五。歿。
(三)延享四年(一
七二七)歿。

苦吟

といふものが松任に來た時、千代はその旅宿を訪うて、始めて教を乞うた。その時、時鳥といふ題で苦吟して夜を徹した後、

時鳥時鳥とて明けにけり

と作つて、その才を認められたといふ話もある。子を亡くした時、

蜻蛉釣けふはどこまで行つたやら

破る子のなくて障子の寒さかな

剃髮して妙林尼と號した時、

髮を結ふ手の隙あいて火燧かな

これ等はいづれも人口に膾炙して居る。作者の實感が、殊に人情味が強く出て居るところが人を引付ける。しかし、その人情味がその句を通俗化させて居る所以でもある。女流の俳人で最も多く佳い作を遺した人としては、私は寧ろ後



加賀の千代

(一)岩瀬郡。
(二)陸奥國白石の
人。松窓と號
した。文政六
年(二四八三
年)歿。年六十
九。

客觀的

代の多代女を擧げたい。
多代女は岩代國須賀川の人、市原氏である。三十一の時婚を失つてから、乙二の門に俳諧を學び、晩年江戸に出て諸俳家と交つた。
空にみち空にきゆるや御忌の鐘
根に雪のはきたためてある椿かな
行くもくるもみな春風の堤かな
ありあけの野ずるに白し春の水
句風が一體に客觀的で、引きしまつてゐて危げがない。これほどしつかりした句を作つた人は、嘗て女流にはない。しかし、それだけ女らしいところは少しもない。
生きすぎて我も寒いぞ冬の蠅
かの女は九十歳まで生き、生前に自分の句集も出して、慶應元年に死んだ。

二四 秋の句、冬の句

まざまざといますがごとし魂祭
大空やひとり更けゆく高燈籠
相照らす夜の野川や天の河
朝顔の影をまきこむすだれかな
負うた子に教へられけり三日の月
季 吟
檉 良
保 吉
星 布
古 友

角力とり並
ふや秋のか
ら錦
嵐
雪



蹟筆雪嵐

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな
蘭の香や袴着習ふ女のわらは
あかあかと日はつれなくも秋の風
嵐 雪
麥 水
芭 蕉

應々といへ
とたゞくや
雪の門
去來

あき風や茄子の葉のあらはるゝ
足はやき雲のけてゆく鳴子かな
ものの音ひとり倒るゝ紫山子かな
蜻蛉の向をそろへる西日かな
行く秋を尾花がさらばさらばかな

木 几 凡 嵐 一
白 董 兆 外 茶



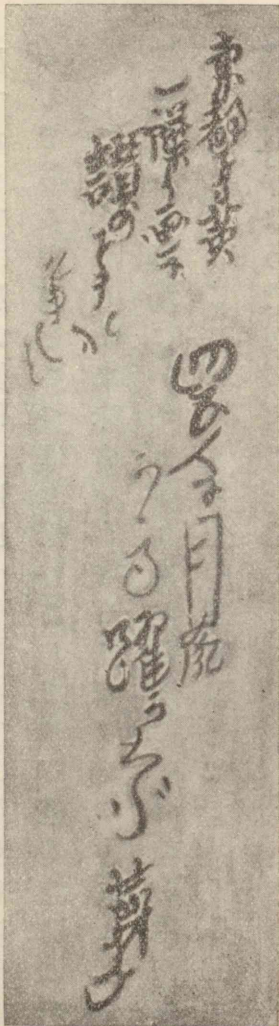
去來筆蹟

しぐるゝやもみの小袖を吹きかへし
つらつらと杉の日表ゆく時雨
こがらしに二日の月の吹きちるか
水鳥の重たく見えて滄きにけり
水底を見て來た顔の小鴨かな

去 曉 荷 鬼 文
來 臺 兮 貫 草

枯あしの日日に日に折れて流れけり
萩すゝきいとこのやうに枯れにけり
蕭條として石に日の入る枯野かな

關 乙 蕪
更 二 村



蕪村筆蹟

一東都なる英
蝶か書に
識のそまれ
ければ
四五人に月
落かゝる躍
かな
蕪村

からびたる三井の仁王や冬木立
茶の花や鶯の子の鳴きならひ
氷る夜や諸手かけたる戸の走り
雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨
ものかけぬ火燵すさまじ煤拂

其 浪 白 芭 成
角 化 雄 蕉 美

助詞の古く
奈元七重七堂伽藍に坐樹女

てにをは
助詞。

片言
不完全な語。

不足する

直覺
感覺の作用で
直接に知るこ
と。

(一)京都市愛宕郡

自修文

二五 俳句評釋

沼波瓊音

俳句は、どうも初のうちはなんだかわかりにくい。てにをはが省いてあつて、片言のやうでもあり、判じもののやうでもあり、或はなぞのやうでもあるといふ感じを、誰も持つものであるが、決してさうではない。俳句は讀むべきものではなくて、味はふべきものである。理窟をさつぱり除けてしまつて、直覺的な感情を基として作りもし、また味はひもするものである。自分で味はふに限る。だから極端にいへば、俳句を解釋するのは無意味だともいへる。それで、ここにはたゞ字句の意義などについて、一通りの解釋を試みようとするだけである。

大原や蝶の出で舞ふおぼる月

丈草

おぼる月夜に大原の景色を見ると、霞んだおぼる月でぼうつとしてゐる所へ、蝶が舞つてゐる。蝶の色も何もよく見えない。た

だ朦朧たる中にちらちら蝶が舞つてゐる姿が見えるといふ景色である。この句を芭蕉が見て、なるほどこれは佳い句である。とほめたさうである。夜、蝶が出て舞つてゐるといふことが、神韻鏗渺たる趣をなしてゐる。

やせ蛙まけるな一茶これにあり

一茶



一茶筆蹟

一茶は悲惨な家庭に育つたので、弱いものに大變同情をもつてゐる。この句なども、單に滑稽のみでなく、裏面に溢れるが如き同情が見えよう。蛙合戦が始つてゐる、瘦せこけた蛙が出て、非常に苦戦に陥つてゐる、そこで一茶が瘦蛙の肩をもつて、まけるな、まけるな、おれがここにゐる。といつて頑張つてゐるところである。ちよつとしたポンチ繪のやうな有様が目に浮かぶ。なんだか、

頑張る
頑固にかまへ
る。
Punch.

新校

(一) 森川許六。俳人。近江の人。正徳五年(一七三五年)生。三十七年(一七六二年)歿。年六十。
 極彩色
 濃い色どり。
 土佐繪
 日本畫の一派。多くは濃厚な色彩を用ひる。
 (二) 向井去來。俳人。肥前の人。寶永元年(一七二四年)生。三十四年(一七五七年)歿。年三十四。

短才
 ちよの足りなこいと。
 (三) 支那の有名な書家王羲之のこと。
 (四) 大伴氏。名は政胤。大阪の人。文化二年(一四六五年)生。八十八年(一八八一年)歿。年八十八。
 一人よがり
 うねぼれ。

一茶までが瘦せた人であるらしく思はれる。
 卯の花に月毛の駒の夜あけかな
 極彩色の土佐繪か何かのやうな景色である。活動は餘りないが、綺麗な句である。この句についてはおもしろい話がある。去來がかういふ趣向を前から考へて、句にしようと思つてゐた。ところが「有明の月にのりこむ」として、後がどうも巧くつかない。月毛駒「葦毛駒」としたり、の字を入れたり、いろいろ苦心しても具合がわるい。終にその句を棄てた。その後、許六がなんの苦もなくこの句を作つたのを見て、自分は短才だと悟つたと自白してゐる。

白團扇隣の義之に書かれけり

大江丸

白い團扇を家に置いたら、隣家にゐた書の自慢な人が、誠に一人よがりな拙い字を書散らして行つたといふ意である。隣の義之に「といふので、嘲つた意味も、また義之氣取の書天狗も現れて

る、受身の書かれけり」は、頼みもしないのに「といふ迷惑さがこもつてゐる。

其角

聲かれて猿の齒白し峰の月
 凄みを詠んだのである。この句は「巴峽秋深、五夜之哀猿叫月」など、よく詩にある趣から作つたのであらう。猿の齒を取立てて白いといつたところに、其角の強みが現れてゐる。

言水

木枯のはてはありけり海の音
 木枯が長く長く吹續いてゐる。非常な音をして吹いてゐる。そのうちに暮方にでもなつたのであらうか、それがほつたり止んで、世間が靜かになつた。すると、向ふの方で、どうつといふ音がする。海の音だ。波がまだ騒いでゐるんだ。さういふところを詠んだのである。この句は、當時大層評判になつた句で、その爲に、木枯の言水といふ異名を附けられたといふことである。

旅に病んで夢は枯野を驅けめぐる 芭蕉

凄み
 すいさま。
 (一) 瑤臺霜滿。一聲之支鶴唳。天。巴峽秋深。五夜之哀猿。叫月。和漢朗詠集。巴峽の上流揚子江の支那揚子江の地に於ける。猿の刻で今午の刻。午前四時。
 (二) 池西言水。俳人。奈良の人。享保四年(一七二九年)生。三十七年(一七六二年)歿。年三十三。

夢幻の境に彷徨ふ
ゆめまぼろしの境を心がさまよふ。

推敲
詩や歌の字句を練り工夫すること。
斯道
この道、即ち俳諧の道

芭蕉病中の吟。最後の句である。芭蕉は元祿七年十月の十二日に歿したが、この句のできたのは八日である。旅行中病氣になつて、それが大變重くなり、心も確かでない、夢幻の境に彷徨うて居る、その時、夢心に枯野を驅廻るやうに感ずるといふのである。重い病氣に罹つたものは、心持がむしやくしやして、ものがわからなくなつて、非常に煩悶するやうな場合に、こんな感じを経験してゐるであらう。この句、初には「枯野を廻る夢心」としたが、いろいろ側にある人に相談したり、自分にも考へたりして、かう直したのである。死病の重患に苦しんでゐながらも、この最後の句を、かくも推敲して居つたとは、いかにこの詩人が斯道に忠實であつたかを示して十分ではないか。

二六 室内の花

與謝野晶子

私は室内に花を缺きたくない。殊に冬は温室から出された種々

あぢきない

内面的に繋が
る
直感す
心霊の交

な花を書齋に置きたい。他の季節には屋外に花を観ることができ
るが、それでもなほ私は室内に花の活けてない日には、あぢきない
氣がする。私の心持の延長が内から中絶し、若しくは外から抑壓さ
れた氣がする。私が花を愛するのは、物質的に愛するのではなくて、
私の熱情や理性や意志の延長した一様式と見て愛するのである。
私の室内にある花は私の像である。私の詩である。私の純粹な愛で
ある。私と内面的に繋がつてゐる一體の物である。私は花に對して
かう直感して、さうして、どの花とも清い心霊の交をしてゐる。
私は花に對して好き嫌ひがある。その醜いものは、私の内にある
醜いものを正視する氣持で憎む。それと同時に、その醜いものの中
にも、できるだけ美點を探り出さうとする。これは大抵の場合に徒
勞でない。美はすべてのものにある。全體になれば部分にある。線
になければ色にあり、姿にある。花になければ香に、莖に、枝に、葉に、果

二律相反
苦愁

實にある。
私は嫌ひな花を必ずしも棄てない。嫌ひな部分と好きな部分との繋がつてゐる二律相反にも、一種の悲しい感情の湧くのを喜ばずにはゐられない。例へば、牡丹は花も葉も莖も好いの、香が苦愁をたへてゐる。また梅は花に比べて枝がごちなく、刺さへもある。それ等の對照に私は心をひかれる。牡丹を見て、單に花と葉と莖とを愛するのは浅い。その苦く、重く、あくどい薫を以て比較され強調されてゐる花と葉と莖とを愛することが、牡丹を眞に深く愛することである。刺のある様柄たる枝から、反對に美しい情調を以て咲いてゐる花を愛することが、眞に深く梅の花を愛することである。あざみの花などについても、同じことが思はれる。
それから私はよくよく花がないと、うらがれた寒菊の花さへ活けて置く。これは決して艶なものでも、美しいものでもない。美の痛

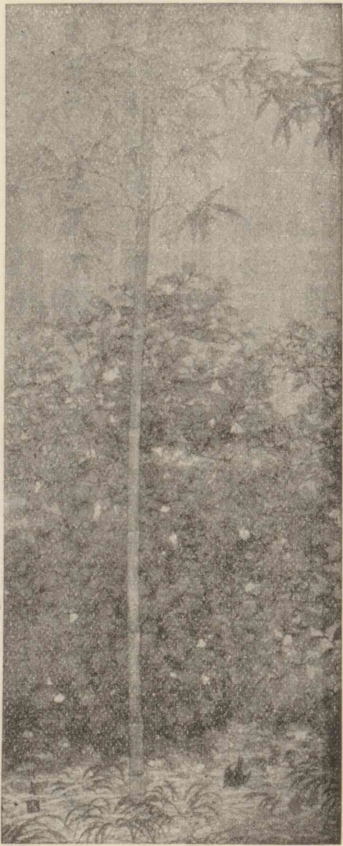
あくどい
強調す

(薊)

Carnation.

道學的

花卉



茶の(恩)田得壽(筆)

茶の中に現れる醜と惡とが、美と善とを引立てるやうに。私はこの

頃の花屋にある花では、寒牡丹、薔薇、カーネーション、紅梅、茶の花、猩狸木を特に好く。水仙は支那趣味の高い爲に、椿は道學的にいかつく堅苦しい爲に、猫柳は花でなくて動物の毛の感じを與へる爲に、南天、萬両、福壽草の類は俗臭がある爲に、私は大して愛することが

反撥す

できない。言換へれば、それ等の花卉に私の感情を移入して、私の内心の一つの像とするには、それを反撥するものをそれ等の花卉が餘計に持つてゐて、私と快く一體になることを妨げるからである。

◎私は花を活けるのに一定の法によることを好まない。插花法は花を殺すもの、花を活ける人自身の心を殺すものだと思つてゐる。花を活ける人は花を愛せよ。愛する花を活けよ。愛には法も型もない。たゞ眞實と誠意と熱情とがあるばかり。私は花を活けるには、その時の私の自然の心持に随つて、たゞ投げこんで置く。私は活けようとする花の上に、私自身の心持を自由に跳ねたり踊つたりさせて置く。かうして投げこまれた花は、私の端的な像である。寫眞で現された、若しくは平凡な畫家の筆でゑがかれた表面的な像よりも、内面的な眞を傳へた私の像である。

—若き友へ—

端的

二七 ユーゴの母

下田歌子

①Besançon.
 呱々の聲
 ②Victor Hugo.
 有名な佛國の詩人。(西曆一八〇二年—一八八五年)

蒙を化して賢たらしむ

③Joseph
 Leopold
 Hugo.

西曆一千八百二年の二月、フランスのベサンソン市に呱々の聲を揚げたビクトル・ユーゴは、いかなる小兒であつたか。身の長は尺に満たず、頭は非常に大きく、手足は極めて細く小さく、頸の骨はないやうに軟かで、生まれて十五ヶ月の間は少しも首がすわらず、ぐにやぐにやとして、始終胸の方へうな垂れてゐた。その不具らしい虚弱な兒が、他日大いに世界に名聲を揚げて、フランスのユーゴに非ず。ユーゴのフランスなり。といはれるに至つたのは、それも誰の力であらう。いふまでもなく、賢にしてかつ健な母が、不抜な忍耐と精密な注意とによつて、弱を變じて強となし、蒙を化して賢たらしめたからである。

ビクトル・ユーゴの父は⁽³⁾ジョセフ・レオポルド・ユーゴといふ人で、早くから軍籍に身を置いたから、かのナポレオン第一世及び

(Joseph Bonaparte)

都度

その弟⁽¹⁾ジョセフ・ボナパルトに仕へて少將まで進んだ。當時戦亂の世のことであつて、こかしこに出征を命ぜられ、初のほどはその都度家族を携へて行つたが、父もその煩に耐へず、かつ種々な困難もあるのを、遂にパリに留めて、子供の教育は母の手に一任することとした。然るにユーゴの母は賢明でかつ膽力のあること、殆ど丈夫も及ばぬほどであつたから、ユーゴと二人の兄とを撫育して到らざるところなく、訓誠實にその當を得た。

ユーゴの母は子を教へることが嚴正で、その命令がよく子供に行はれた。一二の例證を示せば、次のやうなこともあつた。ユーゴが七八歳の頃、その後園に多くの果物がなつてゐたが、母は子供に誡めて、一つでも母の許を得なければ採ることはならぬと命じたので、ユーゴは或日、母様、あの果物が若しよく熟して落ちてゐても、取つてはいけませんか。と聞いた。母は直ちに、勿論。と答へた。ユ

後園

「ユーゴは重ねて、そんなら、落ちて腐つてしまつても、取つてはいけませんか。」と問ふと、母はまた同じやうに答へた。それ故、果物の落ちて腐敗したのが澤山あつたが、誰も拾ふものはなかつた。

また隣家へ或天文學者が引越して來て、隣に男の兒が許多あるのを見て、庭にはいつて來て騒がれては迷惑だからとて、隔の垣を作らうとした。するとユーゴの母は、その儀ならば御心配には及びません。お隣の庭へ行つてはならぬ。と申しつけますから。といつた。その時天文學者の心の中では、さうはいふものの、頑是ない男の子供のことだから、おぼつかないものだ。と、かう思つてゐた。然るに爾後何個月たつても、この天文學者の庭内には、小さい靴の跡は一つも附かなかつた。

頑是ない

ユーゴの母は幼い子供を携へて、スペインからパリに歸つて住んだが、その家は庭園も廣く、種々な草木が榮えて、四時をりをり

兵塵も餘所に

に花咲き實を結ぶ一小天地の樂園で、母子は世界の兵塵も餘所に
 して、ここに平和な春を楽しんでゐたのである。しかし、その當時の
 教育界には、智徳の必要を説く風が盛で、まだ體育の方に注意を向
 けなかつたにも拘らず、賢い母は子供の體力の増進を圖り、さまざま
 まな方法を以て體育を奨励した。またユーゴーが文學の天才であ
 るのを見て、これに教へていふには、「お前は文學で生活の道を立て
 ようとは思ふな。生活の道は外で講じなければならぬ。それだけ
 れば、とても眞正に高尚な文學者となることはできませんぞ。」と教
 へた。子供には園藝、大工、または他の手工學を正課の外に修めしめ
 て、専ら自ら立つの精神を修養させたのである。
 一千八百十七年、佛國學士會院で、題を設けて懸賞の詩を募つた
 時、ビクトル・ユーゴーは十五歳であつたが、この募集に應じて出し
 た詩は、最優等であつた。

不調の主人

應募す



ユーゴーの應募詩の作にふける

その後、母は肺癆衝に罹つて病床に
 呻吟してゐたので、子供は日夜その傍
 を去らず、心を盡して看護した。この大
 病中も、母はユーゴーの詩を見るのを
 楽しんでゐたのであるが、或懸賞詩の
 募に應じて、ユーゴーは一詩を送らう
 としつゝ、あつたをりから、母の大患に
 遭つたので、看護に追はれて、その方に
 心を移す暇がなかつた。一日母はユー
 ゴーに、「この間應募しようといつた詩
 はもうできたか。」と問うたので、ユーゴ
 ーは、「まだ作りません。」と答へると、母は
 「いくら臨時の用ができて、詩作を止

めるやうなことではいけない。勉めて早く作つたらよからう。」と軽く誠めたが、さもさも失望したらしい様子であつた。それから暫くすると、母はすやすやと睡に就いたので、その間にユーゴーは忽ちペンを取つて急作の詩を書いて、その紙片をそつと眠つてゐる母の手に置いた。母は眠から覺めてこれを讀んで、はらはらと落涙して喜んだ。

この母の熱涙に濕うたところの詩篇は、その時應募詩中の最優等たる名譽を得たのであつた。

母は遂に起つことができず、愛兒が孝行な看護の手から離れて、不歸の旅人となつてしまつたけれども、フランスの文豪ビクトル・ユーゴーの名は、この母の丹誠によつて、永く世界に傳はることになつたのである。

不歸の旅人

二八 和宮内親王の御婦徳 萩野 由之

維新の政變は社會組織の一變する時代であつたから、種々な英雄偉人が各方面に現れた。ここに於て西郷隆盛とか、大久保利通とか、岩倉具視とかいふ人々も出た。英雄偉人は必ずしも男子にのみ限つたものでないから、女子にも非常に偉い人の出たのは當然である。さうして、働かれた方面こそ異なれ、その事業は決して男子に劣らないのであつた。和宮親子内親王と申し上げる御方の如きは、その婦人の中の第一の御人物である。

和宮親子内親王は孝明天皇の御妹君で、明治天皇の御叔母に當らせられ、徳川第十四代將軍家茂公の御臺所におなりになつた方である。私はかゝる完全な模範的婦人を尊い皇族の御中に見るのを、無上の光榮と信ずるのである。

徳川幕府が長い泰平を續けて三百年近くになつた頃には、政治



和の宮の御東下

示威的

皇族が
陛下に結
婚をなさる

降嫁

は次第に衰へて、もはや天下の人が徳川氏の政治に厭いて来た。そこへ始めて外國から示威的に交際を求めに來たので、幕府は兵備がないから、餘儀なく交易を許さうとする。朝廷では外國を拒絶しようとする。民間の議論も無論外國との交際を嫌つた。そこで幕府は朝廷と一致して、國是を定めなければならぬが、幕府の威力が到底それには足らぬ。よつて皇室の御威光を假りて、即ち皇室と徳川將軍とは親睦一致であることを天下に示して、その上で外交上の處分をしようと考えた。幕府はその一手段として、孝明天皇の御妹君たる和宮を、將軍家茂公の夫人に申し受けたいと、御降嫁を奏上した。宮は勿論江戸へ降嫁することを御望みにならぬ。天皇も一人の御妹を遠方へお遣しになることをお喜びにならぬ。これが爲にその縁談は容易に纏らなかつた。結局幕府は、宮の降嫁さへ相かなへば、きつと十年以内には外國人を退けませう。と申し上げた。

御臺所

人質

菅絃のこ、
梓のみ春を
さへつるう
くひすにし
らへかよは
す松かせの
こゑ

席温る暇なし

天皇は「外國人を退けて國內泰平になることならば」と仰せられ、
宮も「國の爲とあらば、水や火の中でも辭しません」と申し上げられ
たので、勅許になつて、宮は遂に將軍の御臺所として、江戸へお下り
になつた。即ち文久元年御年十六の時であつた。
そこで當時の志士はこれを聞いて、幕府は宮を人質として江戸



和宮御筆蹟

へ御迎へ申すのである。」と申して憤慨し、はては「幕府討たざるべか
らず。」といふものさへあつた。さて御降嫁の後も、世の中は愈多事と
なつて、十四代將軍も席温る暇もなく、京都へ出張したり、大阪へ下
つたりして、江戸城に居られる日とても少く、遂に慶應二年七月大
阪城で薨去されたから、宮が御夫婦の間の圓滿は僅か五年間に過

世のしがらみ

寡居

時勢

命脉
風前の燈火

ぎなかつた。宮は亡き將軍のことを思ひ出で給ひて、
みつせ川世のしがらみのなかりせば
君もろともに渡らましもものを
と詠じ給ひて、切なる思を述べさせられた。やがて二十一歳で御髮
を切捨てて尼になり給ひ、靜寛院宮と申して、寂しい寡居の御暮し
をなされた。

その後、慶喜公が十五代の將軍となつたが、時勢幾たびか變つて、
慶應三年十月には慶喜公は政權を奉還し、翌年正月には鳥羽、伏見
の戦争が起つて、前將軍は江戸へ逃歸り、官軍は江戸城の總攻撃を
しようと、諸方から江戸へ迫つたので、徳川氏の命脉は風前の燈火
の有様となつた。この時、徳川の家をして全きを得しめたのは、實に
靜寛院宮の御力が主なものであつた。

宮は京都大阪邊の騷はうすうす御聞きになつてゐたが、慶喜公

執成

申し開く

が俄に江戸城に歸つて宮に拜謁を願ふと、宮は慶喜公の爲には先
代の夫人だから、一方ならず御心配になつたもの、もしや慶喜に
朝敵たる行があつたのならば、とても面會は許されない。と、確乎と
申された。二十一歳の寡夫人の御詞としては、なんと凛々しいもの
ではないか。

然るに、第十三代將軍家定公の御臺所たる天璋院夫人の執成も
あつたので、面會は御許になつた。そこで慶喜公も、宮に伏見、鳥羽の
戦争のあらましから、自分には朝廷に對して敵對の心は露ほども
ないことを申し開いて、是非是非京都に對して宜しきやうに御取
扱を願ひますと懇願されたので、宮もそれならば徳川家の一大事
と思し召されて、愈力を御入れあそばされることになつた。
そこで朝廷の方へ、侍女の土御門藤子といふを遣されて、徳川家
の家名だけはお立て下さるやうにと、切に申し送られたが、その御

文言の中には、
 「官軍を差向けらるゝやに承り、當家の浮沈この時なりと心痛いたし候。このたびの一件は、ともかくも重々不行届の事故、慶喜一身をいかやうにも仰せ付けられ何卒家名は立行き候やう幾重にも願度候。後世まで當家朝敵の汚名を残し候ことは、私の身にとりて實に残念に存候へば、汚名を雪ぎ家名相立つやう、私身命にかへて願上候。是非是非官軍差向けられ、御取りつぶしに相成候はば、私も當家の滅亡を見つゝながらへ居るも残念に候まゝ、きつと覺悟をいたし候所存に候。私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨候ことは、朝廷へ恐入候ことと、誠に心痛いたし居候。」
 と仰せられてゐる。御決心の雄々しい様子が顯れて見えるではないか。御身は皇室の御出でありながら、一度徳川氏へ降嫁あらせら

汚名を雪ぐ

れた上は、徳川家の一門と生死を共にせねばならぬと、きつと御決心しました上のことではなくては、とてもこれほどの御文はできぬことと、察し奉られるのである。



(筆方清木鏑)像肖御宮和
 (ることるれらめ認を紙手)

宮の朝廷へ出された御手紙は數數あるが、御決心は益固くあらせら

れた。殊に朝廷から内々、江戸は戦争になるから、京都へ御歸りがよるしからう。」と申し越された時の御返事には、取分け貞操義烈な御心掛の明らかに見えるものがある。
 宮の御力によつて、徳川家の處分も事なく終り、徳川龜之助殿即

貞操義烈
 貞操義烈

御達

ち今の家達公に、御家御相續の勅命が下り、次いで駿河、遠江、三河の三個國の中で七十萬石を、徳川家の領地として下し賜はる旨の御達があつて、徳川家の命脉も永く續くこととなつたが、事のここまに運ぶには、宮の御心盡しが最も大なるものであつた。

宮の御命にかけてもと思し召されたかひあつて、徳川家は永續することになつたから、明治天皇はいかにもして、宮の御心を慰めんものとの思召で、今は京都にお歸りになつて、心安くお暮しの方が宜しからう。」と御勧め申し上げられたところ、宮は

「江戸には芝の増上寺、上野の東叡山寛永寺など、徳川家祖先累代の廟墓所がありますのみならず、増上寺内なる亡夫昭徳院様の墳墓は、未だ靈屋の建築も竣工仕りません。今日私が江戸を去つて京都に永住しますれば、何人も香華を供へ墓の塵を掃ふものもござりません。兩寺の墳墓は、空しく草や苔に埋つてしまひま

竣工 香華

すから。」

と申して、暫し上京の猶豫をお願いなされた。

さて徳川家が静岡に移住のことなど、皆事なく濟まして後、明治二年正月、久々ぶりで御上京あらせられ、明治天皇に御對面あつて、暫し御滞留で、明治七年東京にお歸りになつたが、十年九月脚氣の御病症で、箱根塔之澤に御轉地あらせられ、遂にかの地で昭徳院の後を追はせられた。御年僅かに三十三歳であつた。金枝玉葉の御身を以て、家國の難に遭遇して、しかもその進退宜しきに適ひ、志操愈、堅固によく婦徳を守つて一生を終り給うた宮の御事蹟は、古今に珍しく、永遠に女子の龜鑑である。

— 讀史の趣味 —

二九 狂 歌

(二) 鯛屋貞柳

(二)大阪の人。本名櫻並善八。油煙齋と號した。享保二十九年(一七五〇)歿。

(一)箱根七湯の一。足柄下郡湯本村。金枝玉葉の御身。家國。

ふじの山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらすくたびれもせず

四方赤良

さわらびが握拳を振上げて

山の横つらはる風ぞ吹く

ほととぎすなきつるあとに

あきれたる

後徳大寺の有明のかほ

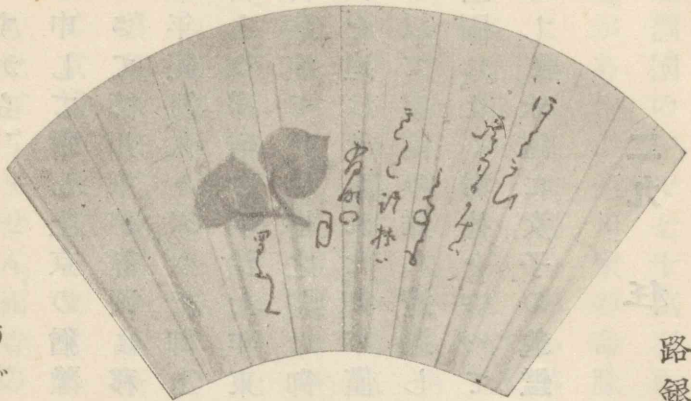
宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものかは

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま



四方赤良筆蹟

大根食... 大聖... 申... 蜀山人... 江戸の人... 名山川雅望... 天保元年... 四九〇年... 年七十八... 年七十七... 名久須美孫兵衛... 文化七年... 年七十七... 蜀山人... 江戸の人... 本名大田... 南畝... 蜀山人と號... 文政六年... 年七十四... 年七十五... ほととぎす... 鳴つるかけ... は見えねと... もきいた證... 據は有明の... 月

大根食... 大聖... 申... 蜀山人... 江戸の人... 名山川雅望... 天保元年... 四九〇年... 年七十八... 年七十七... 名久須美孫兵衛... 文化七年... 年七十七... 蜀山人... 江戸の人... 本名大田... 南畝... 蜀山人と號... 文政六年... 年七十四... 年七十五...

經よむもあり歌よむもあり

朱樂管江

天の原月すむ秋をま二つに

ふりわけ見ればちやうど仲磨

鹿津部真顔

あらそはぬ風の柳の絲にこそ

勤忍ぶくろ縫ふべかりけれ

唐衣橋洲

茶もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

平秩東作

ゆく春を思ひきれとや舞臺から

飛んで見せたる清水のはな

(一)江戸幕臣。本名山崎景貫。寛政十二年(二四六〇年)歿。年六十三。
(二)江戸の人。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號した。文政十二年(二四八九年)歿。年七十九。
(三)江戸の人。田安家の士。本名小島源之助。享和二年(二四六二年)歿。年六十。
(四)江戸の儒者。本名立松東蒙。寛政元年(二四一九年)歿。年六十九。
(五)京都清水寺。

(一)江戸の人。本名岸宇右衛門。寛政八年(二四五六)年歿。年七十。

(二)江戸の狂歌師。

ほととぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

つむり光
木端

世の中をなんのへちまと思へども

ぶらりとしてはくらされもせず

自修文

三〇 笑

人間は笑ふ動物だとか聞いてゐた。なるほど人間以外、笑つたといふ動物のことは見たことは勿論、聞いたこともない。尤も笑以外の感情でも、人間以外、他の動物は完全に表しはしない。動物が悲しんだといふことも、笑つたといふのと同様、見聞きしたことはない。

隊商

主にアラビヤの沙漠などを隊をなして歩く商人。

表白

あらはし。

(Arabian

有名なアラビヤのおとぎばなし集の名。

昂然
元氣のさかなさま。

或紀行文に、隊商の駱駝が悲しんでゐる様子の書いてあつたのを読んだことはあつたが、いかなる感情の表白でも、動物が示し得た例は甚だ稀であらう。但しアラビヤン・ナイトなどを讀んで見ると、人間が動物にその姿をかへられて悲しんでゐるといふやうな話は、よく出遇ふところであるが、なるほどさういはれると、そんな場合でも悲みの方はあるが、喜を表白して笑つたなどいふのは、餘り多くはない。いかにも牛にでも馬にでも、げらげら笑はれたら、をかしいよりも、氣味が悪くなる。考へてもそんなのはよい圖ではない。さうして見ると、笑ふのは人間ばかりかなと考へざるを得ない。自然にも笑ふ方は少いといへようか。無論「自然は無心で、その感情といつては、見る人の心から、その心を、自然に擬したに過ぎないのであるが、波浪が怒るとか、山岳が昂然として控へてゐるとかいつた類の形容は、随分よく見受ける。ただ流が笑つてゐるなどは、たまたまに聞くと、ころである。また花

哄笑
聲高くわらふ
こと。たか
らひ。

笑ひ鳥歌ふともいふから、自然の笑といふことも、可なりあるやうにも思はれる。たゞその笑は微笑にとゞまつて、笑の一部分に過ぎぬのは、是非もないことである。白と、ころが、人間にはいろいろな笑がある。哄笑、放笑、失笑、冷笑、苦笑、微笑、近頃ではそれでも事足りないと思えて、微苦笑なんて、老人にはとてもわかりさうもない笑方までできて来た。これは人間の進むにつれて笑の變化し、また複雑になる證據であらう。そして、人の感情の變化は、一番よく笑に顯れるのであらうとも思はれる。漢字漢語では右の通りであるが、日本の假名で行くと、またいろいろな笑方がある。ここにこ笑ふ。にやにや笑ふ。くすくす笑ふ。げたげた笑ふ。げらげら笑ふのはお化であるが、うらめしやといつて出てくる幽霊などより、かう笑つてゐる化物は甚だ愛敬がある。それからまた、かんらからからなんといいふ笑ひやうがあ

(一)昔支那の惠遠
と或いふ法師が
て虎溪に隱居し
て、虎を渡すに
あつた。たつて
渡ると、虎がほ
えると、虎がほ
或る日、友人二
と、虎がほえ
か、過ぎた時、
虎が氣附いて、
人に大なる事
と、虎溪に笑
虎化縣の故事
に、ある。廬山



虎溪の三笑 (中村不折筆)

る。これも甚だむづかしい笑方であるが、これは天狗の笑方であるから、誰もあんまり見聞きしたことはない。見聞きしたら、これも氣味が悪い方であらう。なほ笑の音響にもいろいろある。アハ、オホホ、エヘ、フッフッなんて、いふかと思ふと、大勢一緒になると、一度にドツと笑ふとなる。かうなると、あらゆる假名を用ひなければならぬのみならず、同じにやにや笑ふとしても、その間に微妙な相違があつて、それは到底文字のみでは盡されない。堪へきれないうれしさを裏切るにやにやもあれば、他をさげすんで笑ふにやにやもある。更に虎溪の三笑とな

(一)唐の詩人。字は太白。寶應元年(西暦一四二二年)歿。年六十二。
 拈華微笑 釋迦が多くの弟子をひねつた華をひねつたもの意味を知ることができず、たゞ微笑したといふ故事。
 (二)本名は東海道中膝栗毛。享和二年(初版返す)に初版返す。江戸の北勢八幡著。次郎兵衛の道中おもしろい物語。東海道中膝栗毛。享和二年(初版返す)に初版返す。江戸の北勢八幡著。次郎兵衛の道中おもしろい物語。

ると、どうもうれしいのだから、人をばかにしたのだから、悟つたのか、甚だ見當のつかない笑になる。
 「お前なんだつて青山などに隠れてしまふんだ。」ときかれて、笑つて答へず、心おのづから閑なり。なんて澄ましたのは李白であつたか、よく覺えてゐないが、とかく支那の先生の笑はむづかしくなる。尤もむづかしい姿といへば、拈華微笑といふのがある。あれはたしかお釋迦様が多くの弟子たちに拈華された時のことだとか聞いてゐるが、佛道の悟があの一旬の中にあるとか。かうなると、笑もなかなか樂ではない。
 一體外國の文學には、意味の深いをかしみなどは随分澤山あるが、日本にはどうも、をかしみを書いたものが乏しい。殊にしかつめらしい武士道のお蔭で、笑はその影を潜めてしまつた。膝栗毛はをかしいにはをかしいが、それこそ私たちに顔をもむけずには居られないやうな笑をもつて得意としてゐる。狂言の中

には、随分微笑をさせるものもあれば、哄笑をさそふものもある。武士道の天下にも、なほこんなもののあるのは有難いが、今日では、この武士道の笑を噛みつぶした習慣からと、今一つには、今日の切迫した生活からと、笑が殆どなくなつてゐるのは情ない次第で、笑事ではない。

ディッケンスのピクキックには、その劈頭に、風に帽子を吹飛ばされた時の心持が、おもしろく書いてある。その一節は殊に笑なくしては讀むことはできないが、事實風に帽子を取られた時の人の態度は、をかしなものである。あれくらゐ眞劍と滑稽とを併せて顯した圖はあるまい。否、眞劍だから滑稽をなすのではあるが、その時の人の笑顔を示してゐる。しかし、心持は決して笑つてはゐない。買ひたての帽子を汚された怨や、他から見られた體面と自分の努力といつたやうな、いろいろなことが混じ合つて、當人の心には、甚だ複雑な感が互に衝突してゐるのであらうが、そ

(1) Dickens. イギリスの小説家。西暦一八七〇年―一八七〇年。
 (2) "Pickwick" 書名。
 劈頭 始め。

心理
心のありさま。

對角的反對
全くの反對

の結果は、自分を嘲るやうな妙な苦笑のやうな笑となつて、それが顯れるのであらう。
急いで馳せつけた電車に乗損ねた時も、大抵の人は笑つてゐる。實は笑つて居り得べき時ではない。惜しいことをした、口惜しいといふ感じのあるべきところだが、あれも人から見られて體裁が悪いといふ爲からか、やはり一種苦笑のやうな笑をするのだらう。事は簡單だが、あれなどもなかなか複雑な心理から出た笑である。

とはいふものの、大抵の人は大事な際には決して笑ひはしない。大事に際して笑つてゐるのは、あはうか豪傑ばかりだ。即ち大事に際して濟まして笑つたやうな心持であるのは、いや、いやゆる拈華微笑の心を持してゐるのは、あはうとは對角的反對をなしてゐるえらい人だ。それとは異なつてゐるが、私は作話のうち、この笑の忘れられないおもしろさをもつた一つの例として、

(一)平景清。悪七
兵衛といふ。
謡曲
うたひ。

忘形見

父の死んだ後に生まれた子。ここで景清が家を出てから生まれた子で、まだ見たことのないもの。

(二)美尾屋國俊。
源氏方の武士。

兜の鉢から左右と後方とに垂れて首をおぼふもの。
覇氣
意氣こみ。

景清の笑を擧げたいと思ふ。

私のいふ景清とは、謡曲にあるそれであるが、その景清は必ずしも笑つてゐるのではない。が、心持はいさゝか笑つてゐる。盲乞食となつた景清は、日向の國に忍んでゐた。そこへその忘形見である娘が尋ねてくる。景清は心強くも、いはゆる武士道の心といふのであらう。景清などいふ男は知らないといつて、その娘を逐ひかへすのであるが、里人の口から事實が漏れて、それが娘の探す父なる景清であることがわかり、止むなく親子の對面をなし、わざわざ乞食なる自分を遠く關東から尋ねて來た心根を察して、その昔平家一方の旗頭として屋島に戦ひ、敵將美尾屋と渡り合つたそのいはゆるしころ引の一段を物語つて聞かすのである。時世非にして、今は盲乞食となつた老景清も、昔を想ひ浮かべて、なほ殘る一片不屈の覇氣を見せるところ、まことに笑ひどころではない。寧ろ落涙を催させるほどに緊張したものであるが、

昔日の笑
屋島に戦つた
時の笑。

(一)戸川明三。英
文學者。熊本
縣の人。明治
三年生。

そのつかんだしころの切れた一段を語つて、美尾屋が「汝の腕の強さの恐しさよ」といへば、景清は「美尾屋が頸の骨こそ強けれ」と笑つて、左右へ退いたといふその笑こそ、極めて複雑な笑で、實はそれはその時の笑でなく、昔日の笑であるが、その氣分に至つては、この物語をしてゐる老衰な景清にまだ残つてゐるので、その笑の氣分心持が、頗る複雑なものとなるのである。私には景清の一曲、殊にこの昔の笑の氣分が、たまたまなくよくて、忘れられないのである。

三一 文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は、一入懐かしい心

(一)曹操「短歌行」
に「月明星希、
烏鵲南飛。」

(二)「吹く風をな
へども、道と思
せに散る山櫻
かな」
(三)「登るべき便
なき身は木の
下にしひを渡
るかな」
(四)「時鳥名をも
雲居にあぐる
かな、弓張月
のいるに任せ
て。」
(五)「埋木の花さ
くこともな
かりしに、み
はなはてそあ
るはれなりけ



(筆郎次頼森金) 關來勿

持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、槩を横たへて、月明らかに星希に、と歌つた一事を想ひ出すと、なんとなく慕はしくなつてくる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に矢を番ひて、衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似のできぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬが、弓張月のいるに任せて、埋木の

(一)「とても世に
もあらぬ身の
かりのちぎりの
をいかで結ば
ん。」
(二)「歸らじとか
引、なき數に
どむる。」
(三)「有明の月も
あかしの浦風
に、波ばかり
こそよると見
えしか。」
(四)「陸奥のいは
でしのぶはえ
ぞ知らぬはえ
きつくしてよ
壺のいしよ
み。」
異祖

花さくこともなかりしに。などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、^(一)「かりの契をいかで結ばん。」の歌と、^(二)「梓弓なき數にいる。」の辭世とである。平忠盛に、^(三)「波ばかりこそよると見えしか。」の風流があつて、すがめの俄殿上人も、優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の^(四)「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。

その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、ここに最大な發達を遂げて居る。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその

院宣

(一)「霜滿三軍營
秋氣清。數行
過雁月三更。
越山併得能州
景、速莫家鄉
憶、遠征。」
襟度

人の缺點まで掩ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久な語草である。
武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事がらである。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違。吉野の花見には諸大名もまたそれぞれ詠歌をもつて居る。上杉謙信が「霜滿三軍營」の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家

想望す

(一)「妻臥病牀」
 兒叫飢。身直欲當。一
 與生別。唯知。皇
 天后土知。

(二)「苦冤難洗恨」
 難禁。俯則悲
 痛仰則吟。昨
 夜城中霜始
 誰知松柏後凋
 心。

(三)「排雲手欲」
 掃妖雲。失脚
 墮來江戶城。
 井底癡蛙過。
 憂患天邊大
 從月關光明。身
 從三湯。家無
 信。夢斬。鯨
 濤。劍有聲。鯨
 風雨。他年。苦石
 面。誰題。日本
 古狂生。

來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義経や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、なんとなくもの足りない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢」橋本景岳の「誰知松柏後凋心」頼三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望京尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな

情緒

民庶

準則

情意

廉耻心
道心

直前邁往

人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

三二 諺と道徳

諺は廣く一般民庶の間に行はるゝ一種の格言にして、常人はこれを準則として、善惡理否を判じ、進退動止を決する等、その勢力著大、世人の行爲を指導し、情意を左右すること多し。鷹は死すとも穂は摘まず。「武士は食はねど高楊枝」の如き、武士道の精神を發揮し、國民の廉耻心を養成したる功頗る大なり。衣食の爲に動もすれば道心を失ひ、卑劣の情を發するに際し、この諺に鑑て自ら耻ぢ、過なきを得たる類、蓋し少からざるべし。而して諺の教ふるところは、利害得失を計較し、自己を中心とし、危険を避け、失敗に陥らざるやう、警戒を與ふるもの多くして、善に向かつて直前邁往の意氣を鼓舞す

意料外

Wander.
ドイツの人
ドイツの俚語
五冊を作つた
西暦一八
七九年

る類は割合に少く、禍福の常なく、希望の實現し難く、人智の不完全にして、世事の意料外なること多きを説きて、人の注意を促す類、多數を占むるに似たり。
金錢の出入、用途、利弊等は吾人が日常の生活と密接なる關係あるを以て、各國共にこの類の諺に富み、ワグネルは金錢に關する俚諺を採録すること、千六百餘に上れり。概して節儉力行を奨勵して、塵積りて山をなし、雀の巢もくふにたまるの理を教へ、稼ぐに追いつく貧乏なきを唱説して、湯水の如く財を使ふ愚を戒むれども、ひたすら蓄財に耽りて吝嗇に陥る弊を指摘して、金の番人となり、寶のもち腐りとなり、小利大損を招き、一文吝みの百失ひたるを戒む。また一朝にして金を得んとするものの不正なる手段を用ふるに至り易きを戒めて、一年の内に富まんとするものは半年の内に刑せらる。といひ、財悖りて入るものはまた悖りて出で、惡錢の身につ

陰徳
陽報

かざるをいふもの頗る多し。支那の「空裏得來空裏去。」ドイツの「得たるが如く失ふ。」及び「不義の一錢は正義の一面を滅す。」スペインの「人の物は主をこふ。」皆これなり。陰徳あれば陽報あり、積善の家には餘慶ある意を語りては、門の外より施せば窓の中へ戻つてくる。といひ、慾に頂なく、足ることを知らずして終に身を滅すに至るべきを諭して、慾のくまたか股さける。といひ、貪慾は袋を破る。といふ。

清涼劑

Tahand.
ユテヤの古典
教訓の義

防腐劑

「金もち金をつかはす。庫中徒に菌を生ぜしめ、唾壺と汚穢を争ふもの。爲に一服の清涼劑たるべきは、タルマッドの施與は富人の鹽。」といへる一語なり。空しく蓄積して世用をなさず、財を腐らせ、併せて身を腐らすもの。にありて、施與慈善は絶好なる防腐劑たらざるばあらず。諺は此の如く施與分財を勸告すると共に、その方法について周到なる注意を忘れず、大風に灰を撒き、唐へ投金、淵へ鹽を投ずる如き無謀の慈善濫與を警戒して、與ふるもの、受くるもの、共

濫與

金を積みて北
斗を支ふ

に中庸を得べきを教へていはく、手から蒔いて、袋から蒔くな。あすもやれるほどけふもやれ。と。金を積みて北斗を支ふとも、冥途の土産とならず。財貨もまた無常の敵を如何ともする能はざるを説いて、イタリには、壽衣にかくしなし。ロシアには、黄金も天に飛ぶべき翼なし。といへり。

鞭撻す

成敗利鈍

財産、地位、名望等すべて自己の利益となるべきものについて、自ら力めずして妄りに他を羨み、徒に隣の寶を數へ、牡丹餅の棚より落下するを望み、天の落つるを待つて雲雀を捕へんとするが如き卑屈なる情心を鞭撻し、獨立自尊、克己、忍耐等の諸徳を鼓吹する男らしき諺少しとせず。男は裸百貫なり。自ら奮つて自家の天地を開拓すべし。成敗利鈍は天なり。世は七轉び八起きなり。男の心と大黒柱は太い上にも太かれ。當つて碎くる覺悟なかるべからず。樂は苦の種、苦は樂の種。不受、苦中、苦難、爲人上人の如き、いづれも異口同音

盛に黽勉努力の徳を教ふるにあらずや。稼ぐに貧乏追ひつかず。蜂蜜と連呼するのみにては、蜂蜜は口中に來らず。神は自ら助くるものを助く。怠けものの頭には神宿らず。汝の務むべきを務めて、然る後その結果を天に委ねよ。自ら助けずして、神の助を呼ぶの權利なし。ギリシヤの古諺にいはずや、神に祈らば自身も働け。と。わがもの食へばかまど將軍なり。わが汗に食ひ、わが家に居る。俯仰天地に愧ぢず。誰か得て我を左右するものぞ。われに口あり。人に囑して吹かしむる勿れ。とは、自ら事を處するの快を教ふるスペインの諺なり。

一敗を以て志を挫くべからず。財を失ふとも憂ふるに足らず。地位名望を失ふもなほ可なり。意氣精神を失ふに至りては救ふべからず。帽を失ふとも頭を失はず。指環を失ふとも指は存せり。ものを失ふも、我を失はざれ。指環は再び得べし。指は改め作るべからず。帽

一片歌々の心

青雲

(一)孟子の語

天賚

薰蕕相混す
信條

參酌す

自暴自棄

子なきも頭は頭なり。指環なきも指は指なり。瑣々たる外觀、なんぞ我を煩はさん。時不可にして一旦下位に居るも、一片歌々の心なほ存するものあらば、再び青雲の上にあるべきなり。若き人々よ、自ら頼んで事を成すべし。然れども、(一)磁基ありといへども、時を待つには如かず、人事を盡して、徐に天命を待つ、の度量なかるべからず。果報は寝て待て、とは正にこの意なり。自ら爲すべきところを爲して、多く期待せざるものは、おのづから神寵を得て、天賚を得べし。泰西の古諺にこれあり、(二)睡者の網に魚たまると。

俚諺には薰蕕相混じ、正に相反するあり。されば俚諺の訓戒を信條とせんとするものは、その一方の教訓に執着して、一切を顧ざるが如き愚に陥ることなく、相反する諺をも參酌して、いはゆる「太鼓をうてば鐘が外れる」の陋を演ずる勿れ。また「毒食はば皿まで」ぬれぬさきこそ露をも厭へ、の如き自暴自棄の惡諺を以て、己の罪過を

遷善進徳

去にし
(一)徳川家康

宗徒
祈らぬ神佛も
なく立てぬ願
もなし

辯護せんとするが如きことなく、よくその佳良なるものを奉じて、遷善進徳の具となすべし。同一の俚諺も、その解釋應用の如何によりて、毒となり、薬となること、なほ同一草木の花中より、蜂は蜜を吸ひ、蜘蛛は毒を取り、牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となすが如し。戒めざるべけんや。 — 藤井乙男、諺と道徳による —

三三 本多重次

新井白石

去にし天正十三年三月に、(一)徳川殿御背中に疔といふもの出で来て、すでに危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、たゞ弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御後の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、平民、百姓などに至るまで、その程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

手を束ぬ

腫物

あつたらしき命

本多重次御枕に取りつき、泣く泣く申しけるは、殿も定めて覚えさせ給ひなん。重次が昔この病を受けしに、立所に驗得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。と申す。諸醫すでに手を束ね、家康また死を決す。この上醫療そのせんなし。かつは命を惜しむに似たり。とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、かほど大事の腫物、軽々しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治せしめまゐらせんとするを、用ひ給はで失せ給はんこと、御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が、御跡にさがつて御供かなふべからず。さらば御先へ参らん。とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、あれ止めよ。と仰せければ、近く侍ふ人走り出で引止め、仰せらるべき旨あらせられ候。といふ。重次大い

殿ばら

えこそ止めね

さも候

に聲を怒らして、最後の暇乞ひて罷り申すものを、見苦しい殿ばらの止めやうや。と罵つて出でんとす。されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。といはれて、げにさも候。とて、御前に参る。

徳川殿、汝はものに狂ひてかくはいふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。また汝等もいかにもして、一日も世に残りて、若きものどもおきてして、わが家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、せんなき死の供せんとすることやある。と仰せければ、いやいや、それは人によつてのこと候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、そのせんなし。重次若年の昔より、ここかしこの軍に従つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふほどのかたはは、重次が身一つに集りて、

負はぬ手も候はず

(一)北條氏直。

はかばかしき
踵を旋らすべ
からず

譜第

(二)武田勝頼。

世に交らんことかなふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも敬はれも仕れ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候ふまじ。まづ御聲の北條殿(一)、わが國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて氣おくれし、はかばかしき矢の一筋をも射出すことかなふべからず。當家亡されんこと、また踵を旋らすべからず。重次それまでながらへて、あの年寄りたるかたはものは、徳川殿の譜第にて何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には耻をさらすらんと、後指さ、れんこと、老の耻何事かこれに過ぎ候ふべき。この比までも、武田(二)の家人等御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀に思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れまゐらせんが悲しきばかりにも候はず。わが身のはてもあさましきに、まづ御先に死することにて候と

(三)艾

申す。汝がいふところことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに至りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる耻を見つべくとも、一日も生残りて、後のことよきに計らふべしと存ずるや否や」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰を背きまゐらすべき」と申す。さらば醫師召させよ」とて召さる。

醫師やがて参りて、御灸治よろしかるべし」と申せば、重次もぐさ取つてすう。御灸の痛み覺えさせ給はねば、もぐさを増し加ふることも多くして、後いさゝか痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけてまゐらせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに御腫物潰れて、膿血夥しう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次はうれし泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。この人かゝる奉公のことども、世に傳ふること多し。悉く記すに暇あらず。大略

を記すのみ。

— 藩翰譜 —

三四 醫者のくるまで

應急手當
急場の間に合
はせる手當

負傷や病氣は手當が後れると取返しのつかぬことがあり、深夜または不便な地で、醫師の間に合はぬこともあるから、一通りの應急手當を心得て置く必要がある。

切創は切口を押へ、創の周圍を硼酸水か清水で洗ひ、ガーゼを當てて繃帯を施すがよい。それでも出血が止まなければ創口の少し上の方を固く縛る。軽い創には取敢へず絆創膏をはつて置く。

水泡
水ぶくれ
忘れても
うっかりして

火傷には直ちに油を塗る。これは空氣にさらすのを避ける爲である。皮膚が赤く腫れて多少の痛みを覺えるほどならば、冷水で冷す。また水泡を生じた時は、綺麗にした針でその縁の方を刺して水氣を取り、硼酸軟膏を塗るがよい。忘れてもその皮をむい

てはならぬ。ランプの火が衣服に燃廣がつた場合には、すぐその人をねかし、着物、蒲團、毛布の類を手早く掛けておさへれば、火は忽ち消える。あわてて水を掛けるのは極めてあぶない。

水に溺れたものの手當は、まづ衣服をぬがせ、腹を己が膝の上に當ててうつぶしに臥させ、その胸部を低くして、少し頭をそらせて、水を吐かせるのである。それでも蘇生しなければ、人工呼吸法を施す。人工呼吸法は仰向あむけに寝かして、子供なら胸の兩脇をおさへては離し、おさへては離し、大人ならばその両手を靜かに上下して、呼吸を促すのである。

咽喉に骨のさゝつたのは、飯の塊か卵の黄味を丸呑にする。それで取れなければ、ピンセットで取る。取つた後は食鹽水でうがひするがよい。

咽喉にもものつまつた時は、その背を一二度強く打ち、或は指を深く入れて、吐氣を催させる。若し貨幣、硝子球などをのみ下し

Pinsette
毛抜のやうな
形した細くて
具物をはさむ器

て吐出させることのできない時は、飯、いも、とろ、等軟かいものを澤山食べさせ、便通と共に出させる外はない。

耳の中に豆粒や蟲などのはいつたのを、簪などでむやみに搔くと、却つて奥の方へ押しこむ虞がある。長い木綿針の先を焼いて、その先を曲げて引掛ければ取出すことができる。細かいものはいつた時は、スポイトを用ひて微温湯で耳の中を洗ひ、或はオレイブ油四五滴をさせば、おのづから流れ出る。目にごみのはいつた時は、成るべく手でこすらぬやうにし、清水を脱脂綿または清潔な布片に浸して眼中に垂らすか、まぶたをかへして除き去るがよい。

蟲にさされた時には、アンモニヤ水を塗る。まむしに噛まれた場合には、取敢へず創口の周圍を成るべく廣くつまんで、できるだけ血をしぼり出し、上部を手拭などで固く縛り、早く醫師の診察を請ふがよい。

(Spirit. (オランダ語) 液體を注入する小さい器具)

(Olive

布片
ぬのきれ。

(蝮)

人事不省
俗に正氣を失ふといふ。何事もわからなくなるること。

卒倒
人事不省になつて俄に倒れること。

中毒
食物にあてられること。

痙攣
俗にひきつけといふ。その状態は白眼をかへし手足を震はせる。

高い所から落ちて人事不省になつたのは、脳震蕩といつて、極めて危険なものである。この場合には静かに臥させて、身體の安靜を保つのが大切である。起したり坐らせたりしてはならぬ。足部が冷えれば湯たんぽを入れ、發熱があれば頭を冷す。卒倒するのは腦貧血が多いが、その時には頭を低くして、靜かに臥させて置く。

中毒と見たら、その食物を吐かせる工夫をしなければならぬ。それは指を口の中に深く入れて、咽喉をなでまはして吐かせる。若し吐かなければ、微温湯、牛乳、茶などを多量に飲ませて、その毒を薄めるやうにする。中にも牛乳は最も効が多い。

子供が痙攣を起した時には、何病にかゝはらず、まづ靜かに床に就かせ、熱があれば頭を冷し、便通がなければ灌腸を施す。痙攣が長く止まなければ、芥子と舘粉とを等分に交ぜたものを、湯か水でこねて、半紙に厚く二三寸四方にのばし、紙の間に挿んで、

下腿 すねから下の部分
覺醒 気がつくこと
窒息 息がつかまること

下腿の内側に五六分間は。但しその部分が赤くなつたら取去つて宜しい。また一時の痙攣ならば、冷水をその顔に吹掛ければ覺醒する。強ひて服薬をさせると、薬液が氣管に流れこんで、窒息させることがある。
いかなる場合にも決してあわてることなく、直ちに必要な處置をして醫師の來診を待つのが、應急手當の精神である。

— 高等小學讀本 —

三五 空しき篤學

鶴見 祐輔

「アブのやうな怠者つたらありやしない。何しろ朝から晩まで本を讀んでゐるつきりで、何一つしやしないんだからね。」
近所の人がさういつて、年若いアブラハムリンカーンを嘲笑つた。それは無理もないことであつた。當時まだ新開地であつたイリ

Abraham Lincoln
西曆一八六〇年
カ合衆國第十
六代の大統領
となつた。西
曆一八〇九年
一八六五年
Illinois
北アメリカ合
衆國中部の州



リ
ヘたに相違ない。そこで「怠者のアブ」といふ名が、いつとなく彼の通名となつてしまつた。

この話をリンカーン傳で讀んだ時、自分には奇異の感に打たれた。それは自分がまだ一高の學生であつた時分であつた。それからもう二十年に近い年月が經つた。そして、今日振返つてその物語を思ひ出すと、しみじみその文字のうちの深い教訓が味ははれる。
讀書といふことは、決して勉強といふことと同じではない。それ

は、散歩といふことが必ずしも休養でないのと同じである。讀書の眞の意義は、私たちがいかに讀書したかといふことに存する。

私たちは往々にして讀書の意義を過重する。あの人は本が好きだといへば、それは結構なことだと頭からきめてかゝる。そして、本人もその氣になつて、安心してゐる。更に一步を進めて、その讀書は全く空しい努力ではなかつたかと反問はしない。その無反省な習慣的努力のうちから、いかに多くの人生の悲劇が生まれて來たか。私たちは讀書の内容を注意深く研究しなくてはならない。

リンカーンの場合には、彼はこの讀書癖の故に、後年あれほどな名大統領となつたのである。しかし、それは彼が漫然讀書してゐたからではない。彼の讀書には、全精神を傾盡するやうな眞劍味があつたからである。彼は燃えるやうな情熱をもつて、あらゆる書籍のうちから、眞理を探究してゐたのである。その讀去り讀來る一ペー

(一)「采菊東籬
下。悠然見南山。
陶淵明」

ジ一ページは、悉く彼の血となり肉と化して行つたのである。しかし、自分は、讀書をそのやうに窮屈にのみ解釋しようとは思はない。そんな肩の凝るやうな讀書以外に、悠然として南山に對するやうな讀書もあり得るはずである。故に趣味としての讀書については、趣味としての遊戯や運動と同じやうに、陶然とした心境も許さるべきである。

たゞここに自分の記しつけようとする感想は、讀書を一生の事業としながら、終にその眞義に悟入せず終る悲しい生涯についてである。それは著しい一つの例をもつて語る事ができる。

英國の大歴史家にアクトン卿といふ人があつた。一八三四年に生まれて一九〇二年に死んだのであるから、餘り短命といふことはできない。彼は名流の子と生まれ、國の内外に於て學窓に悠遊する機會を得、天稟の頭腦は磨かれた玉のやうに輝いた。南イタリー

(1) Acton.

手澤
考證

(Gladstone)
イギリスの政治家。(西暦一八〇九年—一八九八年)
企及す

と南フランスとの風光にあくがれた彼は、霧深いロンドンの冬を避けて、橄欖花咲く地中海の邊に書を読むことが多かつた。彼の書齋には、凡そ七萬卷の書物が整然と並んでゐた。その一部一卷皆彼の手澤が存したといはれてゐる。しかもその餘白には、細字の鉛筆書で、いろいろな意見や考證が記入されてあつたといふ。彼の無盡藏な知識には、何人も驚かざるものはなかつたといはれてゐる。英國の學問を餘り重要視しなかつた佛獨の學者たちも、アクトン卿の博學には敬意を表してゐた。彼はグラッドストーンの親友で、常に交つて時事を談じた。彼は政治を歴史の一過程として眺めてゐた。故に彼の會談には、何人も企及し難い深みがあつた。それにも拘らず、彼は政治家としては遂に何事もなさなかつた。それは、彼の餘りに學者的な性格が累したとの辯解もできる。しかし、彼が歴史家として何等の作品をも遺さずに死んだといふこと

碩學

傳世の書

(Richardgreen)
イギリスの歴史家。(西暦一八三七年—一八八三年)

(Morley)
イギリスの文學者。(西暦一八三八—)

が、自分たちを驚かすのである。この蟻のやうに勤勉であつた碩學が、あれほどな教養と、あれほどな餘裕とのある生活を送りながら、遂に一卷傳世の書を遺さなかつたといふところには、私たちの三省すべき深い教訓が含まれてゐないであらうか。

貧困のうちにも、しかも年若くして死んだリチャードグリーンは、英國史に一新生面を開いてゐる。わが薄命な史家頼山陽も、決して長命であつたとはいへない。しかも、二人ながら後世の青年を奮起せしむべき事業を遺して死んだ。然るにアクトン卿は、その無盡藏な知識を、空しく彼の墓場へ運んで行つたに過ぎなかつた。

それは明らかに一個の悲劇である。彼は六十幾年の精根を盡して、世界人文の記録を集積しつゝ、死んだのである。彼の弟子が集成した四卷の講義録のうちからすら、遂に一個の創意をも發見することができないと、彼の友人のモ一

(1)Cobi.
支那蒙古の中
部にある沙漠。

(2)Spencer.
イギリスの人。
(西暦一八二〇年—一九〇三年)

レー卿が痛嘆したのであつた。
彼の生涯には、人間最上の力である「創造力」が缺けてゐたのである。彼はゴビの沙漠が流水を吸ふやうに知識を吸収しつゝ、遂に一流の清泉をも地上に噴出することができなかつたのである。
同じ時代の哲人スペンサーは、本嫌ひで有名であつた。彼は殆ど書を読まなかつた。しかし、スペンサーは多くの大作を生出した。それは彼が空しき篤學者ではなかつたからである。

—思想山水人物—

改訂女子新國文 卷六 終

浦野製

大正十二年十二月十五日 訂正再版發行
大正十五年九月二十八日 訂正三版發行
昭和元年十二月二十五日 訂正四版印刷
昭和元年十二月二十七日 訂正四版發行

女子新國文
編者 芳賀矢一
發行者 合資富山房
代表者 坂本嘉治馬
印刷所 富山房印刷部

自一至四卷	自一至四卷	自一至四卷	自一至四卷	定價
各金七拾錢	各金七拾錢	各金四拾錢	各金四拾貳錢	
各金六拾六錢	各金六拾六錢	各金四拾錢	各金四拾貳錢	

檢印
AGAG
有所權著作

發行所 富山房

東京市神田區通神保町九番地

合資富山房

電話九段一三三・九三三・九三三番
振替口座東京五〇一番



Text within the top seal area.

發行所 總發行所 山縣

Text below the header, possibly a list of items or prices.

Text in the middle section, possibly a list of items or prices.

Text in the bottom section, possibly a list of items or prices.

...
...
...
...



